
selection dool

北村一芭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

selection dool

【Nコード】

N2011M

【作者名】

北村一芭

【あらすじ】

始まりはあの日だった。あの悲しい事件を語れるまで、俺は長い年月を重ねた。

これから話す事は、4年前に起きた本当のことだ。

実兄の搜索依頼と、猫の搜索依頼が重なった、新米探偵。調査していく内に、いなくなった猫を探してほしいと依頼していた人形作家が猟奇的な姿で発見される。

犯人は誰なのか？兄は？猫は？

ミステリ風？ミステリです。

序章

序章

一月二十一日。今年の場合、大寒。例年は二十日だったと記憶しているのだが、今年は俺の誕生日にあたってしまった。

暦の上で一番寒い日、というだけで、なぜか心まで寒々しい。

誕生日を心待ちにしなくなったのは何時からだったろう。

家を出て、あたたかく祝ってくれる人がいなくなってからだろうか。いや、祝ってくれる人は、今でもいる。いることはいるが。

俺は布団にもぐりなおし、小さく首を捻った。

俺に母親の思い出はない。兄に優しくされたのは幼いころだけだし、父に褒められた記憶もない。

こんなに感傷的になるのは、今日が一月二十一日だから。きっとそう。何もない今日だから。

おもむろに目を開けた。茶色い、木目の美しい天井。手に触れているのは、柔らかな羽根布団。

「あ、そっか。事務所じゃないんだっけ……」

思わず、一人呟いた。この家に居候に来てから、初めての冬。

去年の春、とある事件がきっかけで、この禾又かゆう一家に転がり込んだ。

家主の禾又睦月さんとその娘の葉月との、気がねない暮らしは思いのほか快適で、改めて感謝しつつも、いつまでも独り立ち出来ない自分にうんざりもする。俺は甘えている。

時計は八時を回っていた。俺は気合を入れて、布団の上に身体を起こした。

張り詰めた空気の冷たさに身体がこわばった。

「修平さん、起きました？」

引き戸の向こうから、葉月の声がした。

少し逡巡した気配の後、葉月が戸の向こうから顔を覗かせる。

「起きてます？」

「起きてる。なんだよ、オマエ、学校は？」

「ボクの学校、休校です、って。大雪警報発令中ー」

道理で寒いはずだ。俺は布団の上に広がったままのカーディガンを羽織り、起き上がった。

「睦月さんは？ 仕事？」

「うん。今朝早く。あのね、すごい雪。庭なんか真っ白で、テンションが上がっちゃうです」

「この時期の雪なんか、珍しくないだろ」

両の手を引く葉月の後ろ姿を見ながら、俺は幼いころに散々聞かされた話を思い出した。

「俺が小さい頃にも大雪が降ったことがあるんだ。その時、母さんが俺をおんぶしたまま五回もコケたらしくて。だから今でも俺の頭は絶壁なんだそうだ。危ないから、用もなく外には出るなよ」

葉月の歩みがびたりと止まった。そのまま振り返り、俺の子頭部を背伸びをして撫ぜる。

「あ、本当。修平さん、後頭部が真っ平らだ」

「そういう事。雪はいいから、飯、食わせろ」

廊下を右折して、そのままダイニングキッチンへ直行。葉月もおとなしくついて来た。

椅子に座り、ぼんやりと葉月越しの窓を眺めると、外は真っ白に煙り、俺は小さく震えた。

「修平さん、今晚、何食べたいですか？ 父さんがね、今夜は修平

さんの好きなものにしよう、って」

なんでも好きなもので良いって、と言いながら、葉月が目の前に湯気の立ち上るコーヒーを置く。

手慣れた手つきでパンをトースターに入れ、ふと俺の顔を見た。

「寒いのか？」

俺が頷くより早く、葉月は俺の後ろに回って、母親がするようにとは申せ、俺も葉月も母親がどんなものか知らない　ギョウと抱きしめた。葉月の赤いセーターが顎のあたりでチクチクと乾いた肌をくすぐる。

不意に葉月の力が抜け、次の瞬間、少女の人格が入れ替わった。

快活な葉月ではなく、その声は降る雪より白く透明な、柚月の声で俺を呼んだ。

「……竜塚さん？　ああ、朝食の途中でしたか。すみません。今、作りますから」

柚月が俺の背中から離れた。背中の肉もつつすらと剥がれたように、一層寒くなった。

身体を捻ってリビングを見れば、どうやら向こうは暖かく暖房が焚かれているようだ。俺は柚月が出すバタートーストや目玉焼きを無言でかき込み、礼もそこそこにリビングに逃げた。

ガスストーブと床暖房のダブルタッグで、広いリビングは文字通り楽園と化しており、ソファーに埋もれながら、安堵のため息を吐いた。

そこへ、コーヒークップを両手に持った柚月が苦笑しながら現れた。

「そんなに、寒かったんですか？」

「寒かった」

「冬生まれなのに、ですか？　それとも……」

柚月はカップをテーブルへ置き、自分はココアを飲みながら俺の隣に座った。

「誕生日、おめでとうございます」

「なんで……知ってるんだ？」

「風邪には風邪薬。と、同じくらい常識です」

昨日から鼻を嚙っていたのを知っていたのだろう。柚月はエプロンのポケットからドリンクタイプの売薬を取りだし、コーヒーの横に置いた。

「そんな訳ないだろ？ 睦月さんに聞いたのか？」

「それじゃあ、近所のヒマワリ内科に行くと、風邪の場合はいつでも同じ抗生物質と鎮痛剤しか処方してくれない、っていうのと同じくらい、常識ですから。…あの、液状の風邪薬って、嫌いでしたか？」

「これ、効くんだけどなあ、どうも苦手で」

漢方の甘くて苦い味はどうにも慣れない。飲んだ方が病気になるんじゃないかと思うほど、マズイ。

俺はせっかくだけど、と、机の端に薬を追いやり、豪快に鼻をすすった。誕生日に風邪をひいているっていうのも、なんだか情けない。

「今日は盛大に誕生パーティーでもしようと葉月が張り切っていたので、何か御馳走でも作ろうかと思ったんですが。何か食べたい物、ありますか？」

「この大雪じゃあ、買い物にも行けないだろう？ 危ないからいいよ。別に、祝ってもらうほどめでたい訳でもないし」

「父さんが帰りにケーキを買ってくるそうですから、買い物があれば大学に電話して一緒に頼めばいいんです。ボクも葉月も父さんも竜塚さんのお誕生日、一緒にお祝したいです」

柚月の大きな瞳に見上げられて、ドキツとしてしまった。

暗く重い理由があって、この娘は数奇な運命をたどってしまった。この愛らしい顔立ちでさえ、彼女を不幸にする要因にしかならなかった。長い睫毛、二重のぱっちりした瞳、心持ぼつてりとした赤い唇は、均衡を崩すことなく人形のように、俺の目の前で怪訝そうな

顔をしている。

ジタバタするのも、ひねくれるのも、ばかばかしくなってしまうた。

「ありがとう、柚月。でもな、雪の日に大荷物を持って歩くのは危険だから。今日は家にあるもので済まそう」

俺が笑顔で柚月の頭を撫でると、ようやく柚月も笑顔でうなずいた。大人びた表情が和らいで、やはり柚月は笑っているほうが可愛い。

「そうだ。どうせ今日はどこへも行けないだし、アルバムを見せてください。誕生日に自分を振り返るのもいいじゃないですか。『振り返るほどの人生じゃない』っていうのは、なしですからね」

柚月が珍しく、葉月のような軽口を言った。

俺は精いっぱい嫌そうな顔をして立ちあがり、そしてまた座りなおした。

「駄目、ですか？」

「寒いから嫌だ。俺のアルバム、部屋の本棚にあるんだよ。廊下って寒いじゃん。だから、嫌だ」

「ボクが取ってきます。本棚のどの辺りですか？」

それから暫くして、柚月がワインレッドの古ぼけた布張りのアルバムを二冊抱えて戻ってきた。

「あっちこっち引つかき回さなかったらうな？」

葉月ではなく柚月ならば大丈夫だろうが、軽い口調で聞くと、柚月は花が咲くように微笑した。

「葉月に探してもらったから。……竜塚さんの部屋って、色々な物があって楽しいですね」

「さりげなく気になることを言うなッ」

笑いながら、柚月が机の上にアルバムを広げる。

「これだけですか？」

「うん。あとは実家だ。これは俺が幼稚園くらいまでと、高校の時の。ごく最近のは事務所にある」

長兄が写真魔かというほど、俺の写真ばかりバカバカと撮りまく
り、それが実家にアルバム数十冊分ある。やれ小学校の運動会だ、
文化祭だ、近所の子供会の遠足だ、クリスマス会だ、と、イベント
ごとに整理してあり、何を考えているのか、それは俺の部屋でも居
間でもなく、長兄の部屋に鎮座しているのだ。

「チビの時の写真は、母さんも写ってるからさ。それと、高校時代
のは浩平が焼き増しさせろってうるさかったから、嫌がらせにネガ
ごと持ってきた。中学くらいまでは、せっせと俺のイベントに付き
まとってたけど、高校に入っちゃうと浩平も仕事も忙しくて来られ
なかったからな」

「浩平さん、かわいそう!」

「どこが!」

アルバムをめくりながら、柚月が眉を寄せた。

「ボク、浩平さんの気持ち、わかります」

馬鹿な友人達と、馬鹿面下げて写っている馬鹿写真のどこにそんな魅力があるのか、俺には到底理解できない。偏差値が良くもなく悪くもなく、ドロドロと貯まった無個性な中流意識の行くような学校で、周りの顔ぶれも中学時代に見知った顔と同じという、面白味のない所だった。制服だって、中学の時とほとんど変わらぬ紺色のブレザーで、唯一、高校生になってネクタイを締める事と、靴がそれまでの白い運動靴ではなく、茶色や黒の革靴に変わったただけだ。神を染めたりといった、微々たる校則違反もないまま、大変、無難な高校生活だった。

「これなんか、今のオマエと同年だぞ。クラスにいるだろ。こんなアホ」

真っ白いTシャツに紺色のホットパンツという、やけに若々しい恰好の俺が、赤い鉢巻を頭に巻いて、なにがそんなに嬉しいのかピースサインをして笑っている。いや、本当に恥ずかしい。

「今の高校生より、幼い感じがしますね。竜塚さんも可愛い」

「そりゃ、携帯もなけりゃ、プリクラも出始めの頃だぞ。大昔もい

いところだ」

俺は柚月から乱暴にアルバムをひったくった。すると、ふわりと一葉の写真がアルバムから舞落ちた。柚月がすかさず写真を拾い取った。

「竜塚さん……これ…誰ですか？ この女性……」

写真を俺にぐいぐい押しつける。顔が険しい。

「恰好から察するに、そんなに昔の写真ではありませんね？ 誰なんですか！ この女！」

「お前は俺の女房か！ い、いいだろ、別に」

唇を噛んで、写真から顔をそむけた。真っ黒い子猫を胸に抱いた、若い女性の肖像。その写真の中で、時が止まったままに微笑む彼女の笑顔を、俺は未だに正視できない。

「竜塚さん！ では、どうしてこんなアルバムに隠すように挟んであったんですか？」

「まだ直視出来ないんだ。事務所に置いておきたくなかったんだ！」

「……だったら破って捨てます」

柚月が写真を引き裂こうとする。俺は慌ててその手を引き止めた。「わかった。話すから。話すから、破らないでくれ。彼女の写真はそれだけしかないんだ。それしか…」

忘れていた感情が目の奥から溢れてきた。

あの恐怖と惨劇。

「竜塚さん、泣いてるんですか？」

俺の涙が柚月の手にはポタリと落ちた。

あれから三年の春が過ぎ、もう四年も経とうとしている。そろそろ話せるかもしれない。

俺は彼女の名前を、記憶に封印していた名前を、下を向いたまま呟いた。

「彼女の名前は、早川真実。お前に会う前に、彼女と知り合った。

どこから話そうか。

あれは、雨の日だった。今日のように寒い、もしかしたら、今日よりもずっと寒い日だった」

柚月は俺の手を握ったまま、深くうなずいた。
物語は、三年前の冬にさかのぼる。

1 雨の日の訪問者

1 雨の日の訪問者

雨の日は好きだ。霧雨も、豪雨も、どんな雨も。

それに、客が来ないことへの、かっこうの言い訳になる。

「こんな寒い雨の日になんか、わざわざウチみたいなへボい探偵事務所に依頼に来る奴なんか、いないっつーの」

誰も聞いていないのを承知で、静かな部屋で口に出して言い訳を吐いてみる。少しは気が楽になった。

今年の春に、誰でも入れる三流大学を規定ぎりぎりです卒業して、ここ、横浜市関内に探偵事務所を開いてから、無駄な言い訳にもずいぶん慣れた。

一代でホテル王となった、豪傑と謳われる父親と、なるべくしてなった俺とは大違いの、出来の良い優等生の長兄。それから、自己主張が激しくて要領の良い次兄から解放されるべく、幼馴染の風宮鈴を巻き込んで、ここを開いた方がいいが…。

遠ざかれば遠ざかるほどに、父や兄達の手の上で遊ばせてもらっているのを痛感し、最近ではいささかうんざりしていた。

このオフィスを借りるのも、ローンを組むのも、すべては「竜塚グループ会長の末子」「ドラゴンパークホテルの総支配人の末弟」という肩書が伝家の宝刀のごとく大車輪で活躍し、はつきり言っ

それが説明できさえすれば他は何も必要ない。社会的地位なんて、金でくらませることが出来る。現金でさえ、「家の方に請求書をまわしてください」の一言で、持たずに買い物ができたりもする。やったこと、ないけど。

やれないだろう？ やっぱり。人として。っていうか、男としては。

繰り返し聞かされる小言は、「出来が悪くて」でも「迷惑かけるな」でもなく、毎回「戻ってこい」なのに。

それでも、俺に才能があるのか、ただ単に運が良いだけなのか、犬猫探しから浮気調査まで、些細で深刻な仕事をしつつ、今までこの小さな事務所に寝泊まりしながらでも他人様に迷惑かけずに生きてこられた。それだけは褒められてしかるべきだと思う。

「でも……、客が来ない」
いっそ、ハッピでも来て呼び込みするか？

俺は再び窓の外を眺めて、「や、やっぱ。雨だし」と呟いた。
俺の大好きな雨はやむ気配もなく、滔々と滝のごとく降り続いている。陰雨に塗り込められた気温も下がり、良い具合にやる気も下がってきた。

すると、その時、複数の階段を上る足音が聞こえてきた。

この亀ビルという細長いビルは、一階に一フロアしかなく、まして上がってくるには錆びついた外階段を一行になって上るしかない。上の四階と五階は空きテナントだから、もう少し上ってくる音が長ければ、客だ。

来たとなったら来たで、せっかく早く看板を下ろしてのんびりしようと思ったのに。などと、愚痴が出る。

足音は期せずして、我が、竜宮探偵事務所の前で止まった。

俺は姿勢を正して、ノックしてきた扉の向こうの相手に「どうぞ」と低い声で言った。

「失礼します」

そう言つて姿を現したのは、こんなボロイ探偵事務所には、およそ似つかわしくない立派な背広を着た男だった。それも三人。

誰もが大手企業の重役と思しき年齢と威圧感を備え、肩や足にわずかに残る水滴を手で払いながら、部屋へ入ってきた。「竜塚修平先生？　ですね？」

奇妙な半疑問形で、真ん中の恰幅の良い男が重低音で言った。

「先生」と呼ばれた奇態さよりも、俺は久しぶりにバイトの面接でも受けているような気分になって、どちらが客だがわからない落ち着きのなさで、何度もうなずきながら三人にソファを進めた。

まごつきつつ、出がらしのお茶を三人の前に置き、今一度顔を見渡した。

俺の名前を確認したということは、トイレを借りに来た訳ではないだろう。嫌な違和感でいっぱいになりながら、かすれた声で「それで……？」と首をかしげた。

「初めてお目にかかります。アポイントメントもなく、大勢で押し掛けまして、申し訳ありません。私の名前は、蝶野と申します」

縦の幅よりも横の幅の方が広そうな、真ん中に座る男が頭を下げた。

次に、蝶野の右隣に座る、神経質そうな男が眼鏡を触りながら頭を下げた。

「私は、猪埜と申します」

「はじめまして、鹿原です」

最後に、一番人のよさそうな小柄な鹿原が頭を下げた。慌てて俺も頭を下げる。

なるほど、三人そろって猪鹿蝶ということか。キャラクターと名前が合致してないけど。

「早速ですが、竜塚先生にお願いしたいことがありまして、本日こうして参りました。聞いてくださいますか？」

蝶野がことさら声を低めて俺を睨んだ。なにやら、怪しげな二オイがしてきた。

「どのようなご用件で？ ご依頼の内容によつては、お受けできかねることもございますが」

「簡単な事です。ある方の素行調査をしていただきたい。タイムスケジュールを作っていたきたいのです」

蝶野が何度もうなずいて、猪埜に顎をしゃくつた。

それに反応して、猪埜が膝の上に抱えていた銀色のアタツシユケースを机の上にドンと置き、俺を見据えた。

「調査費用はそちらの言い値で結構。とりあえず相場の三倍は今、即金で持ってきています。こちら時間もありません。竜塚先生にぜひとも首を縦に振っていただかなければ、我々も社に戻れませんどうか、お願いします」

胡散臭い。咄嗟に思った。

蝶野の「ある方の」という言い方がまた輪をかけている。彼らでさえ、会社での地位は平社員ではないことが一目瞭然だ。それなのに、そんな蝶野が「ある人」ではなく、「ある方」と言うという事は、それ以上の人物。しかも、俺のような弱小探偵に名指しで来ることもおかしい。

「もっと詳しくおっしゃっていただかないと。それに、社会的地位の高い方の素行調査となると、人員もそれなりに必要で、ウチみたいな小さな所よりも、大手の興信所などをご利用になった方がよろ

しいのではないかと……」

「何をおっしゃいますか！ 竜塚先生だからこそ、こうしてお頼み申し上げているのです。ええ、先生のおっしゃる通り、多少は難しい仕事かもしれませんが。ですが、我々も、先生を見込んでお願いしているのです！」

鹿原が甲高い声でいきなりまくしたてた。

「こう言えば、信用してくださいますか？ 私どもは刀系紡績を通じて、夜刀家会長と昵懇の仲でして、会長のお孫さんの事件をお聞きしたんです。それで、竜塚先生に、我々も是非に、と！」

もみ手でもしかねない勢いだ。いや、してるか。

「せめて、調査対象者の『ある方』というのが誰なのか教えていた
だかないと……」

「では？」

「いえ、違います。……どなたの素行調査をご希望なんですか？」

答えようとすると鹿原を、蝶野が片手で制して身を乗り出した。低い声を、聞き取れないほどに低める。

「わが社の社長です。最近、秘書でも行動をつかみ損ねておりまして。なに、若い社長ですから、外に女でも囲っておりますと後々厄介ということ。そこで、夜刀家会長ご推薦でもあり、口が堅いと評判の竜塚先生にお願いしたのです。こう言つては大変失礼ですが、なまじ大きな興信所に頼んで事が大きくなり、社長本人のお耳に入つてしまつては困りますし。これは我々が独断で決めた事なので、どうか、ご内密にしてください」

「他の誰でもなく、竜塚先生にお願いしたいのです」

「即金を置いていく用意は出来ています。この金を見過ごされるのはあまりに軽拳と申せましょう。どうぞ、ビジネスなので、ご心配なさらずお受けいただきたい」

猪鹿蝶の順で、強引に俺の手を握った。

「先生は誤解されていらつしやるようだが、これは別に犯罪行為でも何でもありません。社長に内密のまま進めたいというだけで、他に残る暗い条件や理由はありません。それに、我々の上司に、『竜塚先生ならば簡単なことだから』と推されました。その言葉を反故にはできない」

「この一件が無事に済みました暁には、当社の人事関係に絡む身辺調査なども大規模にお任せする用意もあります。先生には才能がありだ。枯渇させるのは勿体ないですよ！」

「失礼ですが、先生のような方が構えるオフィスにしては、あまりにも淋しいように感じます。少しでも、先生の御身分に相当するようなオフィスをお持ちになりませんか？」

「こんなに「先生」を連呼されたのは初めてだ。俺は少しずつ勘違いし始めていった。」

「依頼は、蝶野さんの会社の社長さんの素行調査をするだけなのですね？ どのくらいの期間、調査すればよろしいんですか？」

「受けてくださいますか！」

「もう一人、共同経営者がおりまして、普段なら私一人でも仕事を選びますが、このように大金が絡む問題ですと、彼女にも許可を取りたいので、後日ご連絡を……」

「な、なにを今更！ 早いところ是と云うてください！ どうして躊躇するんですか！ わからん人ですなあ！」

蝶野の態度が変わってきた。明らかにイライラと眉根を寄せ、居丈高に俺を見下ろす。困った愚息を見る目だ。

「猪埜君も何とか言ってくれ」

水を向けられた猪埜は、アタッシュケースを開いて、中に詰まった札束を俺に握らせ、

「この金が欲しくないんですか！ 欲しいでしょう！ 欲しくない訳がない！」

どうしてそんなに断言できるんだ。そりゃあ、欲しいけど。

威圧的な中年男性に気おされて、俺は視野狭窄に陥っていった。まるきり俺一人が悪いことをして叱られているようで、恐怖すら感じる。

そういえば、明日が家賃を支払う最終期日だったわけ。そのくせ、ガスストーブなんか買ったから金がないし。最近、肉も食ってないな……。

「竜塚先生！ 簡単な事です！ 『受ける』と言ってください！ そうすれば、この金も、将来の名誉も貴方のものだ！ おわかりですな？」

まるで、神の言葉のごとく、蝶野の低い声が事務所内に響いた。猪埜が札束ごと俺の手を握り締めて、ひきつつ笑いで「早く！」と言う。

三人から代わる代わるねじ込まれる事、約十分。

正常な理性と判断力は蒸発し、俺はこの怪しい依頼を受けざるを得ない心境になった。

「わかりました。この一件、お引き受けしましょう」

その一言で、三人の猪鹿蝶が「おおっ」と歓声を上げた。ホッと胸をなでおろし、浮かしていた腰をようやくソファーに落ちつける。「いやあ、その言葉を聞いて安心しました。良かった。本当に良か

った」

そんなに喜んでもらえれば、俺としても嬉しい。もしかして、俺って凄い探偵だったのかも。

「竜塚先生に了承してもらわなければ、薬王院さんに何と言われるか！ 嗚呼、本当に良かった！」

鹿原の甲高い声に、俺は一瞬、凍った。

「今、何て……」

薬王院などという名前が世の中にホイホイいるとは思えられない。襟足の辺りがチリチリと焦げるような、くるぶしが溶けるような。何とも嫌な苦いものが胃からせりあがってきた。

「相変わらずですね。修平さんは」

ゆつくりとドアが開いて入ってきた男は、漆黒のロングコートについた水滴を払いながら、俺の顔を見て軽く会釈をした。

「……ハルカ……」

嫌な予感は的中した。

「お久しぶりです。ここも、いつもと同じ。汚いですね」

薬王院杳《やくおういんはるか》は、猪鹿蝶を片手で追い払うと、俺の目の前に腰を下ろし、口の端をつり上げて笑った。

この男、薬王院杳などという、流麗な美女のような名前からはかけ離れた、大柄な偉丈夫で、俺の長兄の、秘書である。

一回りも年の違う兄、浩平が父親の仕事を手伝いうようになって初めて秘書を持ったのは、もう十年も前だ。浩平にとっては、最初の部下が杳ということになる。

正しくは、杳は「秘書」ではなく、「側近」で、杳を中心とする若

手グループが、今の竜塚グループの推進力になっている。

杓は「浩平様」の「出来が悪くて、浩平様や会長に迷惑ばかりかけている頭痛の種」である俺を嫌っていて、会うたびにチクチクと嫌味を言いやる。兄が俺を気にかけるのは、兄の勝手であり、俺が頼んだことでも何でもないというのに。

杓にとってはとにかく俺という存在自体が気に入らないらしい。自信家で、何でも出来て、偉そうで、理論整然としていて、俺が苦手な要素が服を着て、それも、仕立ての良い高級なスーツを着ていつもふんぞり返っている。しかも、俺に甘い兄の前では決して俺を悪く言わず、猫をかぶっている。

「なんでハルカがここにいるんだよ……」

「『どうして？』……愚問ですな。私は蝶野達の上司ですから」

血の気が引いた。一瞬にして、爪先まで真っ白になった。こいつが絡むとろくなことがない。この男は『浩平様』と、会社の利益しか考えない男だ。

俺は馬鹿にしきった顔で微笑む杓から目を反らし、気まずい顔の猪鹿蝶を一瞥した。こいつら、知っていて俺にお世辞を言っていたのか。ちくしょう。

「まさか、本気じゃないよな？　俺に、浩にいの素行調査をしろなんて」

「本気です。正式な契約ですよ、これは。修平さんになら簡単でしょう？　他の誰でもなく、『竜塚先生』になら」

そう言って、杓は珍しく声をあげて笑った。

ああ、何て腹の立つ奴だ。この顔を浩平にも見せてやりたい。父や兄達は杓を信用しきっているし、次兄の耀平も、杓とは同い年という共通点もあってか、大変仲が良い。俺だけ孤軍奮闘して、

そして、負けっぱなしの上、誰からも理解されない。

杓は長い脚を組みかえて、おもむろに煙草をくわえた。すかさず蝶野がライターを差し出す。

「ずいぶんと偉そうじゃん。杓。俺は騙された側だろ。素行調査なんてしないからな」

「騙されていたとは心外ですな。ちゃんと依頼内容をお伝えした上で、引き受けられたでしょう？ だいたい、蝶野達から名刺も受け取らず、社名も聞かないまま依頼を受けるなんて、軽率すぎますね。この三人がわが社の者だったから良かったようなものの、いかがわしい会社の者だったらどうされますか？ 浩平様や会長にいいと言われているからとは申せ、竜塚グループの名に泥を塗るような事だけはしないでください。私が許しません。……それにしても、社会的地位のありそうな中年男性に強引にされれば呆気なく落ちるだろうという、私の予想は見事に的中した訳ですね。わかりやすい方だ。おまけに大金が絡めば、なお弱い。こんなはした金、竜塚家に戻ればいくらでも自由にできるでしょう？ 浩平様が『戻ってこい』とおっしゃってくださいている間に、素直におなりなさい」

「説教にきたのか？」

「説教に聞こえましたか？ それは修平さんに疚しい気持ちがあるからでしょう」

「……」

「仕事もないのでしようが。きちんと代金を出しますから、ビジネスとして、仕事をしてください」

「確かに仕事は少ないよ。でも、ウチの会社関係の仕事だけは、干されても何をされても絶対にしないぞ。家の言いなりには絶対にならない！」

「子供みたいに駄々をこねないでください。これだけの金があれば、当分はこの貧しい生活を維持していけるはずですよ」

「大きなお世話だ！」

俺は勢いよく立ちあがって、事務机の上にあるファイルに手を伸

ばした。俺にだって、事件依頼の一つや二つ……ない。

肩を落とした俺の耳に、いきなり電話のベル音が飛び込んできた。拾い物の割には、気の利いた時に鳴る電話だ。

俺は杳の吐きだす紫煙を目で追いながら、受話器を取った。

「はい、竜宮探偵事務所です」

『あの……チラシを見てお電話したんですけど、そちらで猫を捜してくれるとか？』

電話の相手は若い女性のような口調だ。

杳に背を向け、何の予定も書かれていないスケジュールノートを広げて、彼女に先を促した。

『うちで飼っている雄猫で、五日前から帰ってこなくて……』

杳が後ろで「間違い電話ですか？」と皮肉を言っているのが聞こえ、俺は勢い込んで「必ず捜しますよ」と請け負った。

早川真実と名乗ったその依頼主に、詳しい話を聞く約束を取り付け、電話を切った。

一呼吸置き、俺は心の中で気合いを入れて、杳に向き直った。

「そういう訳で、今、依頼が入ったから。そっちの依頼はお断りする。こっちだって遊びじゃないんだ。身内の問題は後回し。ほら、帰れ」

しかし、杳は怯むどころか、いつもの嫌な笑いを浮かべて、ゆらりと立ち上がった。

百九十センチ近くある杳が、俺を見下ろす。

「いけませんよ、修平さん。契約は契約だ。こちらの方が、成立が早い」

「どこに証拠が？　俺はそんなこと言っていないの」

「証拠なら、ここに……」

杳の手が猪俣の背広の内ポケットに伸び、そこから、何やら小さな機械を取り出した。丸いボタンを押すと、先刻からの会話が冒頭

から再生された。

「き、汚ねえ！ 録音なんかしてたのかよ！」

「修平さんこそ、汚い言葉ですね。いけませんよ、竜塚家の三男がそんな言葉づかいをしては」

「何言ってるんだ。返せよ、それ！」

俺は杳の手の中の、小さなレコーダーを取ろうとしたが、奴は長身に任せて手を高く掲げて素早くかわす。おまけに、反対の手で俺の肩を掴み、上体が揺らいだところへ、腰を払ってこともなげに俺をソファ―に座らせた。

俺は尻もちをついた格好となり、まったくもって忌々しい。

「彼らは嘘など言っていないです。これは竜塚グループにとって、大変由々しき問題です。修平さんにも無関係ではない。しかも、貴方は前金を受け取ったではありませんか」

「あ……、あ、あれは、その人がお金ごと俺の手を握っただけで、俺は別に……って……あれ？……」

悔しさが頂点を越し、逆に冷静になってきた。

いつも長兄のSPのように、どこへ行くにもくつついていく腰巾着の杳が、どうして浩平の素行調査なんて、しかも、この俺に頼むんだ

杳の腰の低さ これでも、杳にしてみれば俺に頭を下げているのと同じなのだ も異常だ。

蝶野達が嘘を言っていないとすると、杳も浩平の行動を掴み損ねているというわけで……これは確かに由々しき問題かもしれない。

「杳はいつも浩にいと一緒だろ？ 俺が探る必要なんてないじゃん。まさか、ただ単に『浩平様』の仕事ぶりを見せて、俺に改心させようって魂胆じゃないよな？」

「ふうん。その手もありましたか。修平さんは浩平様のご活躍ぶりを見れば、その自堕落ではぼ二ートな現状を改めると？」

「俺が聞いてんだよ」

杳に初めて動揺の色が見えた。苦節十年間いびられ続けてきて、

初めて見る顔だ。どうやら、浩平の行動がわからずに、一番困っているのは杳のようだ。

「……なあーんだ。頼れる腹心なんて看板背負ってるくせに。もう要らないって言われた？」

「な、なにを根拠に！」

おや、いい調子だ。この男のウィークポイントはここだったのか。もっと早く知っていれば、快適な思春期を過ごせたのになあ。

「浩にいだって、もっと自由になりたいんじゃない？ あの年で彼女もいないなんてさー」

「貴方なんかと一緒にしないでください！」

杳が目の前の机を思い切り拳で殴った。ドスンという大きな音が事務所内に響いて、猪鹿蝶が身体を震わせる。俺も少しだけ驚いた。

「俺とは似ても似つかぬ、優秀で賢いお兄様が粗忽な真似でもしたら、乳母としては気が気でないってか？ た変だなー。お前もー。」

……でもな、これだけは言っておくぞ。俺は竜塚グループに関わる仕事は一切しない！ 絶対だ！」

俺も負けじと机を叩いた。しかし、ポコンと変な音がただけで、どうにも迫力に欠けた。情けない。

上目遣いに杳の様子を窺うと、固く目を瞑り、見たこともない表情で何事が逡巡していた。

少し待つと、煙草の火を揉み消し、座りなおして溜息を吐いた。

「それでは、私個人からの依頼というのならどうですか？ 金も、私のポケットマネーから出しましょう。何度も申し上げますが、浩平様はまだお若く、大変魅力的な方です。正直に言って、実に個人的に浩平様が心配なのです。性質の悪い女に引っかかっているとは考えにくいのですが、わざと私を遠ざけて、ふらりと外出されるのはどうにも解せません」

「なんだよ。やっぱりただのヤキモチかよ。依頼主が誰かって問題じゃなくて、実家に関わる仕事がいやだって言ってたんだよ。それに、杳はいつも目が届く所にいた浩にいが、どこか遠くに行っちゃうよ

うで嫌なだけだろ？」

杓はうなずかなかつた。もう一本煙草を取り出して、ゆつくりと煙を燻らせ、ただ軽く顎を上げた。

「『修平さんなら』という言葉も嘘ではありません。誰にも、浩平様のプライベートを覗かせる気はありませんが、実弟の貴方にならいたしかたない。今一度、考えてはくだいませんか？」

レコーダーを机の上に置いて、俺の眼を見据える。ここで頭でも下げれば可愛いのに、杓はそんなことは決してせず、口調を変えた。「浩平様は、今やマスコミにも顔を出されるお方です。貴方にとつては『一番上のお兄ちゃん』かもしれませんが、ここにいる蝶野や猪俣を含め、私も、グループの系列傘下で働く人間は、浩平様の将来が即ち自らの将来でもあるのです。低俗な週刊誌に嘘で固められた無責任な記事でも載つて、わが社のイメージと株価が下落しては、修平さんだってこんな道楽商売はしていらなくなりそうですよ。現在の貴方がいるのは、優秀なお父様やお兄様方、そして竜塚グループが合つての事と、お考えください」

「脅迫じゃん。それ」

「脅迫？……そう感じたのでしたら、それでも結構。浩平様のためならば、どんな汚名でも着ましよう。貴方に戯言を言われたくらい、痛くも痒くありませんね」

一々癢に障る事を言う奴だ。

杓に対峙したまま、しばらく考えた。

考えて、俺は決断した。

「杓に恩を売っておくのも悪くないかも。俺の恩はめちゃくちゃ高価いぞ。なにせ、俺にしか出来ない事なんだろう？ これは金のためじゃないからな。覚えておけよ。それでもいいのか」

「……靴でも舐めるとか言われると、困りますけど」

「そんな冗談が言えるなら安心だな。わかったよ。詳しいことを聞くよ」

「はい。では……」

杳は個人的な感情を一切排した顔で、姿勢を正した。浩平の後ろに控えている時の顔だ。

いつの間にか猪鹿蝶はなくなっており、俺は杳から浩平の奇行のあらましを聞くことになった。

二人きりの事務所の窓に、雨が激しく打ち付けていた。

2 人形作家

2 人形作家

「それで、どっちの依頼もOKしちゃったの？」

昨日とは正反対の、抜けるような晴天の下、風宮鈴へかざみやりんは呆れた顔で、俺の話を聞き終わるや否や両手を広げた。

「うん」

「う…うん、じゃないでしょ！ どうするのよ。大丈夫なの？」

共同経営者とは名ばかりの鈴は、「アルバイトでも雇うおつもりかしら？」と意地の悪い口調で首を振った。

薬王院查の言うとおり、従業員もいない道楽商売の我が探偵事務所では、依頼のかけもちはしない 正確を期すならば、「できない」だ が基本である。

鈴は、グレーのトートバッグから手帳を取り出し、もう一度、首を横に振った。

「私、今週は予定がいっぱいなよ。猫を捜しながら、浩平さんの跡を追うの？」

「浩にいい方はさあ、まあ、ゆっくりやるよ」

俺はそう答えて、大きく伸びをした。白いベンチの背当てが骨に当たって、凝った身体に効く。

今日は、以前からの約束で鈴と一緒に、鈴の姉を見舞いに来ていた。ここは、その病院の中庭である。

幼いころに、俺の母親が癌で他界し、それ以来兄妹のように育ってきた俺と鈴だったが、俺と星絵、つまりは、俺と鈴の姉とは、兄達と鈴のようにフレンドリーな関係を築くことはなかった。

快活で気後れすることなく誰とでも気さくに打ち解けられる明るい鈴とは逆に、星絵はどこか陰のある、おとなしい女性だった。

彼女の方が年上というせいもあってか、俺はどう接して良いのか幼いながらもわからず、また、彼女も平生では鈴の後ろに隠れていた。

そんな星絵が、小児科医と結婚し、夫の父親が経営する病院で子供を産むことになった。入籍前の懐妊に、誰しもが驚きを隠せなかったが、両家は若い二人を祝福し、今しがた会ってきた星絵の顔はとても穏やかだった。

「星絵ちゃん、安産だいいね」

俺は末っ子だし、親戚の中でも一番年下というポジションだったし、友人たちもまだ誰も子持ちがいないし、なんだか自分の良く知る女性に子供が生まれるのは、不思議な気持ちがある。

「修平は呑気ね…。まあ、お姉ちゃんなら大丈夫でしょ。光司さんのお父さんは産婦人科医で、ちゃんと担当医になったそうだし？生まれてからだって、旦那が小児科医なら心配ご無用よ」

「星絵ちゃんの旦那さん、光司さんって言うんだ？」

「そう。義兄さん。光司さんは『お兄さん』って呼んでほしいらしいけど、私にとってはね、浩平さんと耀平さんが、『お兄さん』なの」

「俺だって、鈴より年上だぞ」

「修平は『お兄さん』なんて柄じゃないじゃない。『修平』で十分。それで、仕事はどうするの？」

「ハル力だって、どうせ無理を承知で言ってるんだ。大丈夫。いざ

となつたら、浩にい本人に、『最近、どうしてる？』って聞けばいいじゃん」

再び大きなのびをして、昨日の話を思い出した。

杳曰く。

浩平のスケジュール管理をしている杳の隙について、最近、十分でも時間があると、どこかへ電話をかけ、そして、ふらりといなくなる事があると言うのだ。初めての事態に、杳も探りを入れてみたものの、なかなか要領を得ず、どうやらタクシーを飛ばして遠出をしているらしい以外は不明瞭なのだそうだ。

そして、電話をかけるだけの日があったり、一時間以上連絡が取れなくなったり、そんなことがあった後の浩平は、いつも機嫌が悪く、嬉しそうなのだそうだ。

「だってさー。普通に考えたら、彼女とか出来たって事だと思わない？ 昼間の時間帯にいなくなるって言っても、じゃあ、夜はどうなんだ、って話で。そこまでハル力だって監視してないと思うし。」

…してるのかな。まあ、どちらにしたって、無粋な話だよ」

俺は、あの堅物な浩平が、もしやキャバクラ通いなどしているのかと考えると、おかしくて仕方がなかった。

昼間に頻々に会えるとなると、会社員ではないだろう。学生か、さもなければ、夜に仕事を持っていて、昼間は身体が空く女性ということになる。

「女の人って断言できないでしょ？」

「女じゃん？って言ったら、ハル力がギヤアギヤ怒りやがて大変だった。でも、浩にいだって、いい年齢なんだから。いない方がおかしいって」

「修平は、浩平さんに彼女がいても構わないの？」

「どういう意味だよ。ハル力じゃあるまいし」

「……別に。ただね、私は嫌だな。浩平さんに女がいるなんて話。」

そっちは修平に一任する。私は口を出せないし。手伝うなら、もう一方の猫捜しにするわ」

もしかすると、鈴は浩平が好きなのかもしれぬ。そういえば、浩平は鈴の面倒をよく見ていたし。

鈴と目が合った。咄嗟に鈴の方が目を反らす。肩までの跳ね返りの髪が踊って、俺の鼻先をかすめた。

「今、ものすごく見当違いなこと、考えてたでしょ。私は『お兄さん』を取られるのが嫌なだけ。いい？馬鹿な邪推している暇があったら、猫探しの方、詳しく教えて」

俺はそつと胸をなで下ろしつつ、うなずいた。

くたびれた鞆から、ファイルを取り出して鈴に示す。

「明日、会いに行かなくちゃいけないんだ」

依頼相手は、早川真実という二十代の女性。職業は人形作家と言っていた。飼い猫の「マル」を捜してほしいそうだ。

鈴は俺の汚い字を凝視して、ふと顔を上げた。

軽く空を見つめ、そして、膝を打つ。

「この人知ってる。人形作家のMANAでしょう！」

「有名人？」

「一部では。精巧な人形を作る新進気鋭の若手作家よ。個展も作品発表もしないことで有名なの。なんでも、『自分の作る人形は、万人が鑑賞する芸術作品ではなく、ただの一人のための商業作品だ』って言うててね。彼女に人形を作ってもらうために、何年も先まで予約待ちをしなくちゃいけないんですって。愛猫家としても有名で、猫をいっぱい飼ってるのよ。猫雑誌に載ってた！」

俺は依頼主がそんな有名人だった事よりも、鈴が猫雑誌を読んでいるということに驚いた。

鈴はバツが悪そうに、「立ち読みしたの」と付け足した。

「そっかー。すごい人に頼まれちゃったんだな。こっちも手抜きは無理だな」

「ナマのMANAに会えるのよ。凄いじゃない。明日は同行できな

いけど、頑張つてね」

猫好きに悪人はいないという持論を信じて頑張ろう。

鈴に肩を叩かれて、なけなしのやる気を出すことにした。

「それじゃあ、明日、この人に会った後、もう一度電話するよ」

それから少し、くだらない話をしてから鈴と別れた。

次の日は、杳が事務所に来た日と同じような、暗い雨の降る日だった。

しかし、億劫がつていては仕事にならない。

一度ヘルメットを取って、レインコートを羽織ったが、窓の外を眺めれば気が滅入るばかりで、電車とバスを乗り継いで出かけることにした。

車があれば問題はないのに。けれど、俺には免許も車を買う余裕もないのだ。おまけに、こんな場所では駐車場代もバカにならないし、雨の日には面倒だが、まあ、仕方ない。

一張羅のスーツを着て、傘を手に事務所を出た。人に会うときの礼儀だと思っているが、着るたびに些か緊張する。

距離的にはさして遠くなくても、電車を乗り継いで行かなくてはならず、早川の家に向かう道中で、鈴に教わった猫雑誌のバックナンバーを広げてみた。

『らぶねこ九月号』。簡単なプロフィールが載っていた。

『MANA（本名・早川真実）。二十八歳。地元の高校を卒業した後、M美大の造形学科在学中に、ベルギーに長期留学。帰国・大学卒業後、自宅のアトリエにて個別注文の人形を制作。現在は、鎌倉にて大勢の猫たちと一人暮らしをしている。独身』

顔写真は載っていなかった。極端に写真を嫌うらしい。会って拝む楽しみが増えた。

雨の中、到着した早川の家は、古い木造建築の一戸建てで、庭には大木が気ままに茂り、とても女性が一人で住んでいるように見えない。全てが雑然としていて、周囲の家々の瀟洒な雰囲気から完全に浮いていた。人形作家の家らしくない。というのは、俺の勝手なイメージが悪いからか。

それに、番地で指定された時には気づかなかったのだが、この界限は、鎌倉の中でも古くから残る閑静な住宅地として有名な地域で、ここから車で十分も行かぬ所に、俺の実家がある。

猫が家の方まで逃げていたらどうしようかと、一瞬目を伏せた。

いいや。ここで怯んではいけない。

一人で住むには広すぎるであろう家を眺めて、今一度気合いを入れた。物事は良い方に考えよう。この辺りは裏道も知っている。猫を探しやすいじゃないか。

俺は体についた水滴を手で払って、呼び鈴を鳴らした。

どんな美人人形作家が迎え出てくれるのかと期待して待つと、にわかにドアが開いた。

「今日、お約束しておりました、竜宮探偵事務所の竜塚と申しますが……」

「こんな天気の中、わざわざすみません。どうぞ」
出てきたのは、よれよれの青緑色のジャージを着た、これまたイメージとはほど遠い女性だった。

真っ黒のボサボサな髪を無造作に輪ゴムで引つ詰め、化粧つけの全くない顔に、時代遅れの大きなフレームの黒縁眼鏡をかけている。

先ほどからしきりにジャージのズボンをずり上げているのは、ウエストのゴムが伸びているためだろう。胸元にはご丁寧な高校の名前まで入っている。

「すみません。今、作業中なもので」

俺の不躰な視線に気づいたのか、早川はそう言って「どうぞ」と再び付け足した。

玄関を上がるとすぐ目の前に階段があり、その脇のドアの向こうが作業場になっているようだった。一階部分が全て仕事場で、二階が住居スペースになっているらしい。

「上がってください」

階段の上から声が降ってきて、慌てて靴を脱いだ。

そのとき、階段の隅にいた黒猫が俺の顔を見て「にゃあ」と鳴いた。

「やあ、おじゃまするよ」

挨拶すると、黒猫はグルグルと咽を鳴らして足にすり寄ってきた。

子猫と成猫の間くらいだろうか。人間で言うなら少女くらいの黒猫を抱き上げ、頭をなでると、いつそう咽を鳴らして俺の腕に頭をすり寄せる。

その可愛らしい姿に相好を崩し、抱き抱えたまま階段を上って室内に入った。

殺風景でいて、乱雑なダイニングキッチン真ん中に、様々な物が積み重ねられていて本来の板面が見えない足の低いテーブルがある。早川はそれをこっそり片腕でなぎ払った。雑誌や書類などが大きな音を立てて派手に落ちたが、できた空間に満足げにうなずく。軽く手を降り、「さあ」とこちらを向いた。

「さあ、座ってください…」

言葉が終わる前に、振り向いた笑顔が氷った。

俺が何か気に障る事でもしたのかと、小首を傾げると、早川はい

きなりはち切れたように笑いだした。

「すごい！どうして？」

何の事かさっぱりわからない。

俺と腕の中の黒猫を交互に見るため、しどろもどろに口ごもった。必死に言い訳をつくろう。

「いや……。あの、玄関先で、この子が挨拶してくれたから、俺の方も『おじやまするよ』って。それで、なんか、可愛いもんだから、だっこしちゃったんですけど、えと、触っちゃいけなかったとか？」

「違うの！そう、レイが？すごいわ！」

早川は興奮した様子のまま、「まあ、座って」と座布団を差し出してきたので、おとなしくそれに従った。

「マルの搜索をお願いしたものの、今日になってどうしようかと正直迷っていて。でも、レイが気に入ったのなら、お願いしなくちゃね」

俺の膝の上で丸くなる黒猫レイの頭を撫でながら、優しく笑んだ。

「いきなりすいません。びっくりされたでしょう？」

「あ、ああ、ええまあ」

「この猫ね、レイっていうんですけど、ちょっと訳ありで。いつもは私以外の人には絶対になつかない子なんです。うちにいる子達はみんな、保健所から引き取ったり、保護団体や愛護団体からもらったりした子ばかりなので、人間が嫌いな猫ばかりなもので。特にレイは人見知りが激しくて……。あら？」

早川が語る間に、どこからわいて出てきたのか、様々な体色の猫達がぞろぞろと出てきて、俺のあぐらをかいた膝頭や腰に頭をすり寄せて「にゃあ」と鳴いていく。

「本当に不思議な方ですね。みんな『歓迎します』って言ってるわ。まあ、アヤメまで？」

レイとは対照的に真っ白な美猫が、早川の言葉に長い尻尾を一振りした。

「何匹いるんですか？」

「完全室内飼いの猫は、いなくなったマルを含めて六匹です。そのほかに、どうしても家に入ってくれない通い猫が三匹います」

すり寄る猫達の頭や顎の下を撫でていると、みな、思い思いに俺に体を預けたり丸くなる。

「俺、昔からなぜだか猫に好かれやすくて。外で猫に会うと、みんな寄ってきて、膝の上に乗りたいがるんですよ。猫好きが猫に好かれるんだから、嬉しいんですけど」

「見ればわかります。本当に猫がお好きみたい。猫の方もね。良かったわ。猫探しで、まさか猫嫌いの人が来るとは思っていなかったけど、竜塚さんのような人なら安心ね。……ごめんなさい、お茶を煎れますね。それから、マルの話もしなくちゃ。事務的なことも。まずは竜塚さんから、どうぞ」

どうぞと言われても、猫があちらこちらで身体を預けていて、なかなか身動きが取れない。幸せそうな猫たちの邪魔をしないように細心の注意を払いながら、鞆から手作りのパンフレットを取り出し、料金設定などを説明した。

早川は聞くなり即座に「お願いします」と契約書にサインをして微笑んだ。

よく笑う女性だ。第一印象の不格好さとは違い、笑むと花が咲いたように場が和む。

人形作家と言われて、気難しくて無愛想な人物を想像していた。まして大勢の猫と暮らしているなどと、人間嫌いでもあるのかと勘違いしていたところもある。見当が外れて、正直ホツとした。

「今日、マルちゃんの写真をお借りして、ポスターを作ります。近隣に貼って、とりあえず情報を募集しましょう。俺も、この付近を捜しますから。あ、それから、俺のことは『修平』って呼んでください。自分の名字、あんまり好きじゃなくて」

「そう？じゃあ、私も名前で呼んでください。人形を作るときの名前もMANNAですし」

「知ってます。ずいぶんと有名だとか？」

早川は破顔一笑して、「違いますよ」と手を大きく振った。「全然有名じゃないです」と。

「それに、有名になりたい訳じゃないしね。修平さんは、有名になりたいって願望、あります？」

「俺は…… どうか。半々。ものすごく有名になって、今の仕事に反対している身内に認めてもらいたい部分もあるけど、逆に探偵として有名になるってどーよ、って思う。それこそ、有名になるために探偵を選んだ訳じゃないですから」

「よく、テレビに出てる人とかいるじゃない？」

「大変なことになるだろうな。俺の家、ちよつと特殊だから」

実兄の素行調査を依頼されている弟というのは、客観的に見てもかなり異常だろう。…… 自分で言っておいて思い出した。浩平の方も調査せねば……

不意に黙った俺に、早川は雪崩をおこした周囲から、アルバムを捜しだしてテーブルの上に開いた。

猫ばかり写っている。しかし、どの猫も生き生きとした表情で、撮り手が愛情を持って接しているのが伝わってくる写真だった。

「これが、マル。お腹に丸い模様があるから、マル。単純でしょ。室内飼いの猫だけど、たまに脱走しちゃうんです。でも、ちゃんとご飯のときには戻ってくるのに、もう一週間も戻らなくて……」

マルは、白地に黒いバイカラーの猫で、早川の言うとおり、腹の真ん中に丸く黒い毛が生えている。片方の耳がギザギザだし、鼻の横に傷があるため、個体識別しやすいそうだ。緑がかった金色の目が可愛い猫だ。

「可愛いですね、マルちゃん　痛ッ！」

マルを褒めたとたん、膝の上で寝ていると思っていたレイが片方の爪を出して、俺の太ももに刺さった。

早川がそれを見て、また大笑いする。

「レイったら、ヤキモチ焼かないの！ごめんなさいね、修平さん。」

レイは人に懐かないものだから、あんまり『可愛い』って言われたことがなくて。マルに焼いてるんですよ。ねえ、レイ？」

レイは返事をせずに、長い尻尾を上下させた。ふてくされた仕草が可愛らしく、レイの耳元に「レイちゃんも可愛い」と言うと、今度は「みゃあ」と鳴いた。

「すごいわ。手慣れたものね。人間の女性に対してもそうなのかしら？」

口を尖らす早川を見て、俺も嘖き出した。

「そうだったら、もつと幸せになってたかも」

「あら、残念。せつかく口説いてもらおうと思ったのに。でも、私みたいな、口説いてもしょうがないですよ」

思えば、ここは彼女の自宅だ。忘れていたが、男の俺が上がりこんで長居しては申し訳ない。

しかし、早川は平然と笑った。

「人形作りの注文の時は、この部屋でお話を聞きますから。人形というものは十分芸術作品になり得るものだと思うし、芸術的な人形を作る人もいるけれど、私は一人の人のための人形を作りたいの。たくさんの人が鑑賞する対象としての人形ではなく、ある人にしか価値がわからないような人形を。そんな風に思っていたら、いつしか亡くなった人の人形を作るようになっていたんです。最初は叔母から、事故で亡くなった娘の、生前のままの姿の人形を作ってほしいって言われて。私は死んだ従姉妹を知っていたけれど、姿をそのまま写し取った型代は作りなくなかったから、叔母から丹念に話を聞いて、叔母の胸に生き続ける従姉妹を、と思って作りました。出来た人形は、生きていた頃の従姉妹とあまり似ていなかったけど、叔母は喜んでくれた。とても嬉しかったんです。それから口コミで広まって行って、生前の若かったころの妻を作ってくださいって言われたり、別れた夫に引き取られた息子の代わりを作ってください、とか。『自分の作品を手放すなんて』って批判されたこともあったけど、出来た人形に私の思い入れなんか入ってちゃダメ

なんです。お客様の気持ちだけ入っていればいい。そうやって人形を作っている手前、どんな作品に仕上げていくかは、お客様との話し合い：聞き取りに依るところが大きくて。思い出とかいっぱい聞かなくてはいけないから、一番落ちつけるこの部屋でじっくり聞いて作ります。……話し、ズレちゃいました？」

「少しズレたけど、真実さんがどんな人なのかわかった。凄いですね。立派だ」

「立派だなんて、そんなことはありません。意固地なだけです。ようするにね、私が仕事を引き受ける人は、相当切羽詰まっている人ばかりだし、頭の中は思い出でいっぱいなんです。私の格好とか、そんなの気にする人はいないと思って」

「まあ、確かに、しんみりと思い出を聞くのに、ドレスは必要ないもんな」

よれよれのジャージには、ちゃんとした意味があつたのかと、反対に嘆息した。すると、早川は自分の格好を大げさに見分し、口を尖らす。

「私、洋服って大事な所が隠れていて、寒くも熱くもなければ同じだと思っんです。こまめに掃除しても、猫がいるからすぐに汚れるし。確かに、少しは考えろって言われるけど」

「興味は他にもあつて、そっちまで手が回らない、とか？」

「したいことがあるの。しなくてはならないこと。今は人形作りと猫だけで手いっぱい。今回も、仕事が重なって忙しいんですよ。本当なら、マルも自分で捜したいけど、難しくて」

「そのために俺がいるんですから。真実さんに代わって、必ずやマルちゃんを捜しますよ」

ここで太鼓判をポンとは押せないが、大きな事を言っただけで笑いかけた。

「ありがとうございます。それで……一つ頼みがあるんですけど……あの、マルの調査状況を逐一教えていただきたいんです。修平さんがちゃんとお仕事をしているかどうかとかじゃなくて、『今日はど

の辺りを捜したけど、いなかったよ』って、そんな事で良くって。他の仕事との兼ね合いもあるでしょうから、毎日じゃなくてもいいです。でも、進捗状況を教えてほしいんです」

何を言われるのかと身構えたが、そんなことはお安い御用だ。

俺はレイの頭を撫でながら、大きく頷いた。

「真実さんのお仕事のお邪魔でなければ、捜した帰りにここへ寄ってもいいし、構いませんよ。大切なご家族がいなくなったんだ。ご心配でしょう？俺の方は大丈夫ですから」

「ああ、良かった。本当に。レイ、貴女の目はずいぶんと正しかったわね」

レイは顔を上げて、誇らしげにひと鳴きした。

結局は長いしてしまった事を詫びて、真実の家を退出した。

帰り際、レイが何度も鳴いて俺を引きとめたが、連れて帰る訳にもいかず、苦笑しながら手を振った。

外はすっかり晴れていて、今にも歌いだしそうな柔らかな陽光が輝いていた。

来た時と同じく電車を乗り継いで事務所に戻り、真っ先にマルのポスターをパソコンで作った。

猫探しには根気が必要だ。今回の件は、マルが家猫だったことから、何らかの理由で帰れなくなった可能性がある。遠くへ行きすぎて迷子になったとか、最悪、子供に悪戯されて、どこかへ繋がれているとか。何事もなく元気でいてくれると良いのだが。

事務所を開いてから、家には帰らずにここで寝泊りをしているため、ソファアーに寝転んで、少し仮眠をとった。

いや、仮眠のつもりがそのまま熟睡してしまったらしい。夕飯も食わないまま、気がつくと朝になっていた。

朝　　と言っても、世間的にはお昼前。差し込む光で目が覚めた

俺は、とりあえず近くの銭湯へ行き、その帰りに食えるものを買って事務所に戻った。

風呂に入っても目が覚めず、まだぼんやりとしながら、見切り品のリンゴと菓子パンをコーヒーで流し、腹ごなしを終えた。こんな生活をしていたら、いつか倒れるな、俺。

今日はいい天気なので、愛車のモンキーにまたがり、昨日作ったマルのポスターをリュックに詰めて早川の家へ向かった。わずかに春の香りがする風が心地よく、鼻歌でも出そうな頃、早川の家に着いた。

バイクを止め、呼び鈴を鳴らす前に、何気に玄関ドアを引くと、抵抗なく開いた。

不用心だと思いつつ、二階に向かって「すいません」と呼ばわった。すると、傍らのドアが開き、見知らぬ若者が現れた。

「どちらさん？」

男に厳しい口調で言われても、その姿に驚いてしばし言葉が出なかった。

若い男は、二十代前半くらいだろうか。黄色い髪の毛をポニーテールにして、耳と鼻にシルバーピアスがいくつも輝いている。サイケデリックな柄のシャツを二の腕までまくっているのだが、肘の内側に剣のタトゥーまで見える。

男はぴつたりとした黒い革パンのポケットに手を入れて、「ねえ、どちらさんですか？」と言った。

「あ、ええと、昨日、真実さんに、猫のマルちゃんの搜索を依頼された、竜塚探偵事務所の竜塚と言いまして……」

俺の言葉尻にかぶって、男が「ああ！」と大声を上げた。

「アンタが『奇跡の男』！レイが気に入った唯一の人ね。先生に聞きましたよ！へえ、レイって猫のくせに面食いだっただ。ああ、先生なら今、降りてきますよ。さっきまで客が来てたんでね。こっちへどうぞ。人形作りに興味があるんでしょ？」

男が半分身を引いて、仕事場のドアを開けた。

躊躇する俺に、男が破顔一笑した。

「自己紹介が遅れましたね。俺はMANA先生の押し掛け弟子の比賀俊一です。週に何度か、こうして通って、教えてもらってるんツスよ」

笑うと子供っぽい顔になる。見た目よりは怖くなさそうだ。

俺は安心して比賀の後についた。

昨日、ちらりと覗いた仕事場は、二十畳はあろうかという広いワンフロアに、様々な人形作りの道具やパーツが並んでいる。アトリエというよりは作業場に近い雰囲気だ。

壁に沿って置かれた大きなチェストの上に、少年や少女の人形が、白磁色の肌を晒して並ぶ姿は、見慣れぬ俺には不気味だ。精巧に作られているからこそ、美的な感動よりも、リアリティが迫ってくる。

「ああ、それねえ、見本品なんツスよ。今作ってるのは、そっちの女の子のヤツと、これね」

比賀がシーツのような真っ白い布の上に座る少年を抱っこして笑った。その人形と俺の顔を交互に見比べて、鼻を鳴らす。

「あれえ、コイツ、竜塚さんになんか似てねえ？」

「コラ！比賀くん、触っちゃ駄目！」

唐突に早川の声が飛んできて、比賀が飛び上がりばかりに驚いて、人形をそつと置いた。

「先生……」

「先生って言い方もなしでしょ？……修平さん、ごめんなさい。お待ちせしちやった？」

早川は、昨日とは打って変わった姿をしていた。

髪の毛を肩に流し、ハイネックのセーターに、ロングスカート。アクセントに、鮮やかな色のモヘアのショールを掛け、微笑む。

「比賀君に人形を見せてもらってたから……ええと、あの……」

ちよつとした違いなのに、女性とはかくも変わるものなのか。それに、俺の態度も。

早川は静かに歩みより、「じゃあ、二階へ」と笑みを深めた。

呆然と立つ俺の裾を比賀が引つ張った。

「ほら、見とれてないで、さっさと行く！先生ねえ、最近、水瀬さんって 客なんだけどさ、その人が来ると、ああしてオシャレするようになってさあ。ビックリした？大丈夫。中身は変わってないから」

比賀の気さくな調子に、ようやく足が動いた。

俺は早川の後について階段を上り、昨日通されたダイニングに、すり寄ってきたレイを抱えて入った。

この部屋も、雑然とした雰囲気は変わらないものの、昨日とは違って片付いており、あれだけ堆く積み上げられていたローテーブルの上には、色鮮やかな果物が描かれたテーブルクロスまでかかっている。

早川が振りかえり、口をあんぐりと閉じられない俺に座を勧めた。「ちよつと座っててください。私、着替えてきます」

ロングスカートと黒髪をひるがえして、早川がドアの向こうに消えた。

残された俺は、ぼんやりと腑に落ちない気持ちで部屋を見回した。よく見ると片付いている、という訳でもなさそうだ。どこか別の部屋で大移動したのだろう。

室内を見回る内に、テレビの横のホワイトボードが目に入った。

テレビの画面と同じくらいの大きさのそれには、あらかじめ消えないインクでノートのように横罫線が数本入っていて、その行間に行儀よく女性らしい文字で何事か書かれている。

『八時ノ打ち合わせ（水瀬様）』

『比賀くん朝』

『三時ノ美容院 予約済み』

その他にも、野菜の名前　買い物メモ代わりなのだろう　や、
電話番号、次の日の予定まで雑多に記されていた。

「お待たせしました」

もう少し近寄ろうと腰を浮かせたタイミングで、早川が隣室から戻ってきた。

ハイネックのセーターはそのままだが、ロングスカートはジャージに代わり、長い髪の毛はゴムこそ輪ゴムではないものの、引っ詰めて頭頂に束ねられていた。

「ごめんなさい。ちよつと、お客様だったもので」

「水瀬さんってですか？」

彼女の頬が心なしか桃色になった。

「比賀くん？」

「ええ。まあ。それに、あそこにも」

俺はホワイトボードを指差した。

「……お仕事ですからね！」

「俺に念を押さなくてもいいですよ。ただ、仕事相手と打ち合わせをするときはジャージで十分だって言ってなかったかなあ、と思っ
て・それに、朝の八時からってのも、早過ぎじゃないですか？」

見ず知らずの水瀬某に妬いたのではなく、単純に疑問に思った。

しかし、俺の言葉を早川は意地悪と受け取ったらしい。顔を一層赤らめ、口を尖らせた。

「お仕事の前に寄ってもらったんです！水瀬さん、忙しい方だから。……それより、今日の成果はどうだったんですか？」

「忘れてた。ポスターを作ったので、見てもらおうかと思って」

俺はリュックから自作のポスターを取り出し、テーブルの上に広げた。

に十分ほど、早川とマルの搜索ポイントやポスターを張り出す場所を相談し、話は再び雑談に戻っていった。

「俺、人形は一人で作るものかと思ってたから。比賀君を見て驚きましたよ。彼、美大生？」

「そう。元は私のお客様だったの。いえ、違うわね。私が作った人形を後学のために、って嘘をついて買ったんだから」

「どういう事です？」

早川の口調は穏やかで、どうやら怒っている訳ではないらしい。俺は崩れた正座をそのままに首を傾げた。

「私の人形が欲しいからって、存在しない死んだ妹の話をでっち上げて依頼してきたの。巧妙に出来てね、白血病で、小学校四年生の夏休みに亡くなった、とか言って」

「もしかしたら、今まで真実さんが作ってきた人形の中にも、そういうのがあったかもしれませんね」

「うん。だから、そうまでして私の人形を欲しかったのなら、弟子になる？って言ったんです。格好はあんなだし、口は悪いし、男のくせにお喋りだけど、根は真面目で素直な子なのよ」

「ふうん……」

「あ、でも！」

急に早川が俺の肩を掴んだ。勢い込んで言葉を続ける。

「付き合っていると、そんなことは全然ありませんから！家に泊まらせることもないし、私、年下に興味ないから！変な詮索は止めてくださいね！」

「うん、ま。真実さんが好きなのは、『水瀬さん』ですもんねー」

「そう！」

言ってから、早川は口を押さえて真っ赤になった。

軽く出た当て推量が、ばっちり当たったようだ。

早川はがっくりと肩を落として、世も果てもないくらい暗い顔で俺を一瞥した。

「意地悪」

「意地悪じゃないですよ。いいじゃん。好きなら。どうして嫌がるの？」

「好きじゃないのよ。別に、そう…『好き』なんかじゃ…嫌だ、好きだなんて！ああ、もう！どうしよう。違うんだってば！」

小学生でさえ、今時こんな反応はしないだろう。それほど狼狽して、顔を赤くしたり青くしたりしている。見守る猫達が不安げに早川にすり寄った。

「三十路手前の女が、こんなに照れるなんておかしい？」

「そんなに不躰な顔で見えました？」

「火星人も見るみたいな顔でね。だから！違うのよ！別にね、そういう意味でなく！勢いで『うん』って言っちゃっただけで」

「それで保留しておきましょう」

「悔しい。そんなウソツキを見る目で言われても、全然嬉しくない！」

「聞いてほしいなら、聞きますけど？」

「結構です！」

肩を怒らせてそっぽを向く彼女は、何とも可愛らしく、俺は大笑いしてしまった。

結局、その場は笑いながら退室し、帰り際に一階の作業場で人形の土台と格闘中の比賀に「マナ先生、何かしたんですか？」と問われた。

「二人だけの秘密」

そう言っつて、マルのポスターを片手に早川の家を出た。

3 兄と猫と

3 兄と猫と

ポスターを早川真実の家の付近に数百枚貼った後も、マルの行方はようとして知れず、残念ながら、手がかりも全くなかった。

仕事を受けた以上、この程度で「はい、おしまい」と降参する訳にもいかない。

俺は連日、アスファルトに顔を寄せ、手製の猫捕獲ボックスを仕掛けたり、這いつくばってマルを捜した。

生来の猫好かれ なんとという造語だ のため、日に何度も猫達には出会う。だが、一番会いたいマルにだけは、どうも尻尾さえも拝めなかった。

時には、近所の暇な（言いかえれば自衛意識の旺盛な、頼もしい）主婦からも意見を聞いた。

近所における早川の評判が概して良好で、猫をたくさん飼っている人にありがちな、ご近所さんとの摩擦もないらしい。

誰か、悪意のある近隣住民がマルをどこかへ捨てた、などと言う線は消えた。

本格的にマルを捜し始めて一週間。俺はもう一つの面倒な依頼をようやく思い出した。

長兄である、竜塚浩平の素行調査。何が悲しくて三十路半ばの兄を追わなくてはならないのか。これなら猫の方がましというものだ。嘆いていてもはじまらないので、仕方がなく浩平に直接アタックすることにした。

携帯電話を握ってはしまい、ボタンを押そうとしては止め、マルを捜しながら決心がつくまでそうしていたが、太陽が真上に来る頃、ようやく電話をかけた。

「浩平？おつ、俺だけど……」

実兄を相手に吃る自分を笑う余裕などなかった。言葉が続かなくて息苦しくなる前に、電話の相手は大きな声で嬌声を上げた。

仮にも、ドラゴンパークホテルの総支配人にして、竜塚グループの社長たる竜塚浩平は、三十六歳という年齢を一切感じさせない奇妙な喜びようで答えた。いつものことだが。

『どうしたんだ！修平！まさか、お前が電話をくれるなんて！ん？どうした？何か困ったことでもあったのか？』

「今……平気？」

『平気だとも！ちょうど杳の車で移動中なんだ。どうした？元気ないじゃないか。コラッ、杳！ラジオ消せ！』

杳が心の中で舌打ちする姿が目に見えかぶようだ。浩平に向かってではない。俺に向かって。

浩平はなおも「どうした？」と甘ったるい声で続ける。

「実は……えと、えっと。……最近、元気？何か、変わったこととか、ない？」

『ないよ。父さんも耀平も元気でやってる。修も元気にしてるか？ちゃんとゴハン、食べてるんだろうな？甘いものばかり食べていたら、身体に悪いぞ。杳の話しじゃ、お前、事務所に寝泊まりしてるそうじゃないか。俺が事務所の近くにマンション買ってやるからきちんとした家に住んで、規則正しい生活をしなさい。防犯面だつて、その方が安心だから。家に帰るのがどうしても嫌だと言うなら、お兄ちゃんも強くは言わない。でも、何も事務所に寝泊まりしなくたっていいだろう？なんなら、家政婦でも雇って、ちゃんと栄養管理もできれば文句ないけど。それから……』

「ああつ、わかった！ありがとう、いつも心配してくれて！でも、俺は大丈夫だから！」

『大丈夫なもんか！修は疲れるとすぐに熱を出すだろ。すぐにお腹も壊すし。バテると痩せるし。お前が病気で倒れた時、誰もいなかったらと思うと恐ろしくて仕方ないよ。そうだ、杓を毎日見回りに行かせようか？俺が行きたいところだけど、なかなか身体が空かなくてな。ううん、やっぱり、管理人がしっかりしたマンションをうべきだな。知り合いの不動産屋なら、駅前に……』

「いいってば！本当に！俺は大丈夫だから！いざとなったら鈴が来てくれるし、ハルカに毎日来られたら、逆に具合悪くなるよ。だから、浩にいちゃんは心配しないで。仕事、頑張つて！」

『修平……なんて優しい子なんだ。今度、絶対に時間を作るから。晩飯でも食おうな。そうだ。修の好きな銀座のケーキ屋のチョコレートケーキ、送っておくから。それと……』

「う、うん。ありがとう。じゃあ、浩にいちゃんも元気で！」

………不覚だ。駄目もいいところ。話しにならないとはこのことだな。

俺は笑顔で電話を無理やり切り、深々とため息を吐いた。

返す手で、鈴に電話をかける。

『あら、修平、その声はいよいよ浩平さんに電話したのね？それでいつものように言われたって訳？』

我が幼馴染はエスパーだったのか。

鈴は軽く笑って、「仕方ないわよ」と寤めた。

『いつも言ってるように、浩平さんは修平が心配でたまらないだけあの優しさを皮肉と受け取ったら、私が許さないんだからね。それで、その愚痴を言うために電話してきた訳じゃないでしょうね』

「それもありつつ。……マルがさ、みつからなくて。ちよつと助けてほしい」

『へえ。珍しい。うん。いいよ。でも、その前に。会ったんでしょ？MANAに。どんな人だった？』

俺は鈴に促されて、早川真実の印象を鈴に教えた。俺が感じた人柄、容姿、弟子である比賀俊一事。

『いやあ、そんなに素敵な人なら、私も一度お会いしたいわね』

そこまで弾む声で明るく言い、続けて、急に声が低くなった。

『修平の好きな人、ですもの』

『ち、違うつて。『好き』の意味が違う。たとえば、俺が鈴を『好き』なのと同じだよ』

『同じ……なの？…そう、わかった』

『なんで声が低いままなんだよ！』

不可解なまま、鈴は「あつそ」と素っ気なく電話を一方的に切った。

俺のモンキーのシートの上で、三毛猫が丸まり直してこちらをちらりと見る。

「わからないね、女の子は」

三毛猫は高い声で「みゃあ」と鳴いた。猫の言葉はわからなかったが、慰めてくれていると思うことにした。

翌日。日曜日の朝。いつもと変わらぬ明るい笑顔で、風宮鈴が事務所にやって来た。

事務所の簡易キッチンで朝食とお弁当を作ってくれ、それを持ってマルを捜した後、早川の家へ向かった。

一週間前を最後に、早川を訪ねていない。いつも電話で済ませていたのだ。それにしても、鈴がマル捜しに協力してくれることよりも、怒っていないことが嬉しかった。おまけに、重ねてそんな自分の情けなさに呆れた。

昼まで目いっぱい捜して、やはり見つからず、空振り。

申し訳なさで小さくなりながら、鈴を伴って早川家の呼び鈴を鳴らした。

出てきたのは、先日とあまり変わらぬ容貌の比賀だった。俺の顔を見て、軽い調子で「どうも」と手を上げた。

「今日はカノジョ連れッスか？」

比賀は鈴を見るなり鼻の下を伸ばして、俺を肘でつついた。
すかさず鈴がフォローする。

「はじめまして。私は修平の仕事上のパートナーをしています、風宮鈴と言います。比賀さんですよ？お話は修平からかねがね……」
「そういう訳なんで。真実さん、いる？」

鈴は妙に「仕事上のパートナー」を強調して、もう一度比賀に微笑んだ。サービス過剰だ。

比賀は俺と鈴を交互に見やると、にんまりと笑って、鈴に「比賀俊一です。はじめまして」と握手を求めた。
そんなの、握ってやらなくていいのに。

「あ。先生なら、上にいますよ。今日は予定がないから大丈夫でしょう。上がってください」

鈴と比賀の間に腕を入れつつ、「ありがと」と笑って、階段を上った。

途中、階段に座っていた黒猫のレイが大きく目を見開いて、俺にすり寄ってきた。

「あら、可愛い。真っ黒なのね」

鈴が、抱き上げたレイの頭に手を伸ばす。すると、レイは耳を後ろにして鼻に皺を寄せた。

「レイは人に慣れないらしい。俺はほら、例の特異体質」

「違うのよ。人を見てるんだわ。この子」

鈴は不服そうな顔をして、足早に階段を上がった。

階段を上がりきった所にある、もう一つのドアをノックして、「

修平です」と呼ばれる。

すぐに中から早川の声がして、ドアが開いた。出迎えた彼女は……俺は驚いて、抱きかかえていたレイを落とすてしまった。

早川真実は、真つ黒で硬そうだった長い直毛を、肩の辺りでバツサリと切り落とし、なおかつ女性らしい柔らかなパーマをかけていた。印象が全く違う。

しかも、全く化粧つ気のなかった顔には、唇に淡いピンク色の口紅がひかれ、肌色もずいぶんと明るい。

「そうか……。それに、眼鏡……」

思わず口に出てしまった。時代遅れの黒ぶち眼鏡ではなく、フレームが小ぶりのしゃれた眼鏡になっていた。

想像を超える変貌ぶりで、その、ええと、垢ぬけて、とても美人になっていた。

呆然と立ちすくむ俺に、鋭い鈴の視線が突き刺さった気がしたが、動けないまま口をだらしく開けていた。

一方、鈴は比賀にしたのと同じ自己紹介をし、優雅にお辞儀をした。

「はい。どうぞ、中へ。あら？修平さん、どうしたんです？そんな顔して」

仕草もどことなく女性っぽく　いや、彼女は元より女性ではあるが、柔らかくなった気がする。

「すげえ……綺麗になったなあ、と、思ってた……」

鈴が俺の足を踏んだ。かなり痛かった。

早川は前とは変らない笑い方で噴き出すと、手を叩いて大笑いした。

「何言ってるんですか！髪のを切って、眼鏡を変えただけよ。ほら、修平さんが来た日にね、美容院に行ったの」

そつえば、ホワイトボードに《三時〰美容院》と書いてあったつけ。

狐につままれた気分だ。ぎこちなく、俺と鈴は床に座り、スカートをひるがえしてキッチンへ行く早川を見送った。

早川はまだ笑っている。

部屋の乱雑さは相変わらずだ。猫もそろそろ出てくる。

「まだ変な顔をしていますよ、修平さん？　それで、今日はどんな？　出されたコーヒーを一口飲んで、ようやく落ち着いた。」

「鈴が、真実さんに会いたかったって言うもので。すいません。ええと、でも、午前中は搜索してきました。一応、ここここにはいなくて俺は地図を広げて、今日まで搜して、見つからなかったポイントに丸印をつけた。」

「相手も動くので、いなかったからと言って注意は怠らず、もう少し聞きこみとかしてみようかと思っています。迷い猫を保護している人とかいるかもしれないので」

「そう。そうね。じゃあ、そんな感じでこれからもよろしくお願いします」

早川は軽く俺に頭を下げ、今度は鈴に身体を向けてニツコリと微笑んだ。

「で、風宮さん、どうして私に会いたいなんて言っただんです？」

真意が掴みかねる俺とは違い、鈴は決意を秘めた目で早川を見つめて答える。

「以前、雑誌でMANA先生の記事を読んだんです。私も猫が好きだから、どんな方なのかな、って。ただの好奇心です」

鈴もニツコリと微笑む。

二人して微笑み合うこと十数秒。先に早川が嘖き出した。

「あははは。ごめんなさい。そんなに警戒しないで。私の事も、『先生』なんて止めてください。名前で呼んでね。私も『鈴さん』って呼んでいいかしら」

「構いませんけど……」

「だから、警戒しないで大丈夫。私、修平さんのこと、狙ってないから」

「はあ？」

思わず頓狂な声を上げてしまったのは俺だ。鈴はちらりと俺の顔を見て、「はい」と言った。

「私ね、好きな人がいるの。だから、修平さんとは何でもありません。彼、女の子を褒めるのが上手いし、一緒にいて楽しい人だけど、年下は好みじゃないの」

さりげなくヒドイ事を言われた気がする。俺は軽く反撃してみた。「それって、『水瀬さん』の事ですか？ この間は『好きな訳じゃない』って真っ赤になってたくせに……」

「一週間前はね。でも、なんだかわかつちゃったんだもん。水瀬さんと一緒にいると、他の人と一緒にいるのとは違うドキドキがあるし、側にいてほしいな、って思うし」

「そういうの、わかる」

「鈴さんも？」

「うん。私は一緒にいた時間が長すぎて、ドキドキしたりすることはあまりないけれど。特別なんだ、って痛感しちゃうときがあって」

「そうそう。何か、何だかわからないけれど、他の人とは違うの。」

「代わりはいない感じよね？」

「だけど、相手は気付いていない」

「私もなの。一方通行で……。それも楽しいけど」

唐突に打ち解けてしまった。彼女達は、長年の親友のように俺を無視して話しに花を咲かせ始めた。

居づらくなり、俺は階段を一人で降りて、比賀のいる作業場に顔を出した。

「あれえ、修平さんだけお帰り？ さっきの彼女はどうしたんツスカ？」

「真実さんと何やら恋愛話で盛り上がってる。意味がわからん。……だけどさ、真実さん、どうしちゃったの？」

俺は側にあつた丸いスチール椅子を引き寄せて座り、作業を止め

て手を洗う比賀に口を尖らせた。

「ああ、あの変貌ぶり？」

「そう。美人になるのはいいけどさ。マジで驚いたよ、俺」

比賀は手を拭いて「あははは」と破顔一笑した。

「俺もね、びつくりしましたよ。大学があるから、週三ペースとかで通わせてもらってるんだけど、急に美人になっちゃってんだもん。俺は、アーティストとしての彼女をすごく尊敬してるから、『女性』って意識はなかったんスよお。意識させない格好をしてたしねえ。でも、最近じゃあ、あのくたびれた高校ジャージ姿はほとんど見ないし、身の回りの事とかも気を遣うようになりましたよ」

「例の『水瀬さん』の事で？」

「先生も言っていました？ 曰く、『水瀬さんにだらしない格好を見せたくないっていうよりは、水瀬さんの事が好きな女がだらしないんじゃない、失礼だ』って。俺にやあよくわかんねえけど」

向かい合って座った比賀は、青いカップを両手で包みこむようにして持ち、複雑な表情で長いため息をついた。

「俺もね、先生が綺麗になるのは大賛成ツスよ。目の保養っつか？ でも、最近の先生、ちょっと変わり過ぎかなあって思うんスよ」

「そんなに急に変わった？」

「急っていうか……全くそんな事してなかった人だから」

「君がそんなに保守的だとは意外だな」

こんな作業場で粘土をこねているよりは、ライブ会場でダイブしたり、モツシュピットで暴れている方が似合いそうだ。

比賀は自分のくたびれたTシャツをつまんで笑った。

「格好は良いんス。ただ、仕事にちよつと支障を来しているのがね。今、仕事がダブってるって言うてたじゃないっすか！。一方は、先生が熱を上げてる、水瀬さんの《シュウ》。もう一方は、作るのが今回で三体目のお得意様、持田さんの《キヨコ》。カウンセリングに時間がかかるってのはわかるんだわ。持田さんの方は、もう聞かなくても大体わかってるし。でも、ちよつと水瀬さんの方に肩入

れしすぎてると思うんすよ。俺は。先生の良い所は、製作者の想いを込めない、クールな所じゃん。だから、今の状況、俺的にはムカツクっていうか……」

「妬いてるんだね」

「違うつつつてんじゃんかよ！」

「ううん。男として妬いているんじゃないくて、弟子として、先生を取られるのが嫌なんだろう？ 真実さんには《クールで客観的なアーティスト》でいてほしい訳だ」

俺はコーヒーを一口飲んで、比賀に微笑みかけた。

「その顔、反則ですよ。怒る気が失せる。いいよな。顔がイイ奴つて」

「君、矛先がズレてる」

「女なら一発でしょ。あ、なんか、腹立ってきた。……って、ああ、そうか。わかった」

殴られるかと思ったら、比賀は自分の膝を打って俺の顔をまじまじと覗きこんだ。

俺の頬に両手をあて、「うん」と再度頷く。

「アンタ、水瀬さんに似てる。水瀬さんが来ると、先生、ものすげえ、メロメロになっちゃって、腹が立つからさあ、帰り際とかに睨んでやんだわあ。そうすつと、さっきと同じような顔で『さようなら』って言うんだぜ。アホか、つーの。でも、アイツに微笑まれると、怒ってたこっちが馬鹿らしくなるんだよな」

「俺は君に睨まれたら、微笑まずに逃げるけどね」

「あはは。ああいうタイプは一緒に飲みに行きたくねえな。女の子、みんなそっちに行きそうだもん」

「そんなにいい男と似てるなんて、光栄だね」

「あ、ワリイ。水瀬さんの方が、アンタよりイケてる。金持ちっぽいし。よく見ると似てねえかも」

今時の若者らしい、悪意のない言い方だったので、二人で声を上げて笑った。

一瞬だけ強く光った棘はなくなり、比賀はとても打ち解けた顔でコーヒーを呷った。

その姿を横目で見てから、改めて作業場を見渡す。土足のまま作業するため、床には木材の破片や木屑が転がり、よく見ると二階同様に乱雑だ。早川らしいと言えば、早川らしい。

「今、何を作ってたの？」

俺は土台　　というか、大きな木の机の上にある白い粘土の塊を指差して言った。

「これは土台にかぶせる粘土の大本。これを練って練って薄く延ばして土台にかぶせる訳。いい？」

比賀は立ちあがって、空のコーヒークップを持ったまま、白い布がかぶせられた人形の前に立った。

「先生が作る人形っていうのは、等身大が基本な訳よ。だから、軽過ぎてモリアリティがないし、重すぎて持ち運ぶのに支障があるじゃん？　でえ、本当の人体の構造に似せて、胴体の部分は背骨の代わりの心棒に針金で肋骨みたく杵組みを組むんだ。それに薄く伸ばした粘土を肉付けしてあらかた作って、その上から和紙を貼る。手足も各々、軽い木材を芯にして、後からくつつけるんだよ」

「和紙を？　表面は石膏とかじゃないんだ？」

「粘土が固く固まるから、石膏みたいに見えるだけで、ウチでは石膏は使わないし、死人の人形を作ってるんだから、型取りもしないあえて最後に木芯は抜かないけど、仏像の脱活乾漆造りの要領と似てるかな。和紙の上に麻布を貼って、また和紙を貼って。そういうのを繰り返して作ると、かなり皮膚っぽくなる。先生が凝り性だから、髪の毛も人毛を買って自作するし、夜とか結構コワイッスよ」

試作品の人形が一斉にこちらを見たような錯覚を覚えた。怪談は苦手だ。胃が痛くなる。

俺は身体に布をかけた少年の人形を向こうへ押しやろうと手を伸ばした。

すかさず、比賀の制止の声がかかる。

「すみません、腹は押さないでください。人間と一緒に、腹の所にはガードがないんですよ。スポンジとか入れるんですけど、今は製作中だから」

「殴ったら、穴が開いちゃうの？これ？」

「穴、開けたら、亡くなってる人形のモデルと、ウチの先生に、ものすごく恨まれますよ」

「やらないよ。そんな恐ろしい事！」

どだい、他人が一生懸命作った作品を壊すような無粋で野蛮な真似はしない。

比賀は俺のおびえぶりに苦笑して、人形の布を外した。

「俺は恨まれるとかつてより、こんなに美しいものを破壊するなんて、そんな冒険、絶対に許さねえ。自分が殴られるより痛えと思う。

先生はね、製作中の人形を絶対に触らせてくれないんだ。今、俺が作ってるのは、あくまでも試作品。先生の技術を学ぶのが精一杯で、精神までは手が回ってねえ。先生が年に数体の人形しか制作しないのは、自分の魂を削ってるからだって思う。マジでスゲエんだよ、MANNAって人は」

白い布の下から現れた少年の人形は、頭の大まかな造りと手足、それに腹にぽっかりと穴をあけた胴体といった姿だったが、比賀の言う通り、崇高な美しさを感じた。

「そんなMANNA先生が、どうして今回は一遍に二体も造ってるんだ？」

「水瀬さんの方はだいぶ前からの予約だったけど、持田さんが急にどうしても、って横やりを入れてきて。こっちの《キヨコ》は、持田さんの死んだ娘さんで、一体目は先生がこんなに有名になる前に死んだときの十五歳の姿を造ったらしいんだ。で、二体目は生きていたら高校入学だからって。今回は、生きていたら今年で二十歳だから、成人式に振りそでを着せてあげたいらしいよ。どうしても、二十歳の《キヨコ》が欲しいんだとさ」

「そんな風に想ってたら、本物のキヨコさんは死ぬに死ねないじゃ

ないか」

「死生観って人それぞれじゃん？俺には持田さんのこと、わかんねえけど」

彩色が施される前の、真っ白なキヨコはどことなく早川真実その人に似た顔をしていた。

俺も幼いころに母親を亡くしているが、人形になって再び戻ってきてほしいとは思わないし、母と同じ顔の人形を飾りたいとは思わない。

「ここへ来る客は、どつか病んでるんだよ。それも、先生が治してるって感じ。だから、実際には人形を造らないで終わっちゃう人も大勢いるんだよね。先生が人形を量産しないもう一つの理由はそれ」
「彼女なら、そんな凄惨な事もできそうだ」

比賀は自分が褒められたかのように、誇らしげに胸を反らせた。

「あたりまえじゃん」

素直に言える、比賀の若さが羨ましかった。

そこへ、鈴が二階から降りてきた。ようやく会話が一段落ついたらしい。

連れだって家を辞す時、早川は俺ではなく鈴に「また来てね」と言った。二人は共通の秘密を持つ友人になったらしかった。

「比賀君と何を話していたの？」

帰りの電車の中で、鈴が俺の腕に手を絡めながら言った。

「俺の方こそ聞きたいよ。真実さんと何を話してたんだ？」

「修平が先よ」

「……別に。比賀君に人形の造り方とか聞いてただけだよ。それで、鈴は？」

「そうねえ、主に洋服の話し、化粧の話し、音楽の話し……とか」

その「とか」が一番怪しい。どうせ俺の悪口でも言っていたのだろう。だらしがない、とか。

鈴は俺に寄りかかったまま目を閉じた。

「いい人ね。鈴さん。あたしより年上だけど、可愛いわ。水瀬さん

の事、本当に好きなんだって。私達、二人とも上手くいくといいねって言ったの」

俺にはいまいち、どういう意味か理解しかねた。

今更、鈴に空々しい恋愛感情など抱いている訳ではないが、それでも幼馴染以上には想っている。彼女が他の男を想う時間など、一分一秒たりともあつてほしくない。それを癒えない自分の弱さを隠し、俺は黙っていた。

降りる駅に近付いて、俺は思いつきを口に乗せた。

「俺が初めて会った真実さんは、今日の真実さんと全く別人のようだった。女性は誰か好きな人が出来ると、綺麗になるんだな」

「あんまり変わらないのもいるけどね」

「どこに？」

「ここに」

鈴は自分の鼻を指差して笑った。

「さあ、帰ろう。今日は私が晩御飯も作ってあげるわ。どうせ、あの簡易キッチンじゃあ、簡単なものしか出来ないけど。煮物くらいならできるから。南瓜の煮つけと肉じゃが、どっちがいい？」

「今日、泊まっていけよ」

「……………バカ」

一笑に付されてしまった。

半分本気で半分冗談だった言葉は、怒っているのか呆れているのか、はたまた照れているのかわからない口調ではぐらかされた。

その割に、その日の晩御飯は南瓜の煮つけと肉じゃがとほうれん草の胡麻和えと大根と油揚げの味噌汁という、俺の好物ばかりが並んだ。

むろん、風宮鈴は門限の十時前には帰って行った。

数日後、雑事にかまけて早川の家から足が遠ざかっていると、俺

の代わりに会いに行ってきたと、鈴が事務所にやってきた。

真っ白い、雪のようなコートを脱ぎ、鈴は両手をこすり合わせてソファに座った。

「どうだった？彼女、元気だった？」

鈴にコーヒーを手渡し、俺は脚を組み替えた。その膝頭を鈴が手の平でピシヤリと叩いた。

「それが聞いてよ。びっくりしちゃったわよ、私！」

今日はいつもの跳ねっ返りの髪の毛を三つ編みにしているため、髪の毛の束が肩にかかっている。

「真実さんね、髪の毛を赤っぽい茶色にして、化粧もね、すっごく上手で、この間よりも一層美人になってたの！」

「俺も行けば良かった」

「バカ」

睨まれてしまった。

「でも、なんでそんなに急に、髪の毛いじったり化粧したりしてんの？」

「はたと目覚めたみたい。普通は好きな男のが出来てデートする時とか、会社で働くことになったときとか、そういうターニングポイントが設定されてるけど、真実さんは、それがなかったんですって。今回は水瀬さんショックなんじゃない？修平は女の子が綺麗になるのは賛成でしょ？」

「嫌いじゃないけど、好きな子が綺麗になりすぎちゃうのは、ちょっと不安だな……」

自分に自信がないから、あまり綺麗過ぎてしまうと、自分と釣り合わないのではないかとか、余計な心配をしそうだ。綺麗になる前の彼女に惚れたのだから、あんまり変わられても戸惑ってしまう。

「ふうん」

今度は上目遣いに見られた。赤くなって、笑っているらしい。

カップを覗きこみ、「おかわり」と差し出してきたので、新しくコーヒーを淹れながら、俺も「そういえば」と続けた。

「水瀬さんの事も聞いた？」

「うん。すごくかつこいって言ってた。まあ、惚れた人間のフィルター付きだから、どうだかわからないけど。あの人に似てるって俳優の……」

鈴は、ある若手俳優の名前をそらんじた。くつきりとした二重の甘い顔で、個性的な演技もするその俳優は鈴のお気に入りだ。それなら、鈴も気に入るかもしれない。

「顔はどうとしても、いい人なのよ。水瀬さんって。今、真実さんが造ってるのは、水瀬さんの亡くなった弟さんの人形で、中学へ上がる前に事故で急逝してね、今回は、憔悴してるお母さんにプレゼントするためなんですって」

「貰っても嬉しいと思う？」

「わかんないけど。その弟君と水瀬さんは血が繋がってなくて。義母の連れ子なのよね。つまり、本当のお母さんじゃない継母に、大枚はたいて贈ろうとしてるって訳。金持ちっぽい発想だわ」

「俺には理解しがたい」

「金持ちはいいわよ？」

「貧乏で悪かったな」

家へ帰れば金はあるが、帰れないのだから、金がないということだ。

金か……と遠い目をした瞬間、電話のベルがけたたましく鳴った。嫌な予感がする。

電話に出たとたん、受話器を置きたくなった。

『どうも、杳です』

「あ。ああ……」

『お久しぶりです。全然報告がないもので、お忙しいとは思いましたが、催促の電話をかけさせてもらいました』

言葉は丁寧だが、口調が嫌みだ。杳は慇懃無礼に笑って、「忙しいは……ないでしょうけど？」と付け足した。

「それが、すげえ忙しいんだよ」

『猫を捜すのが？それはそれは。……浩平様は相変わらず行方をく
らますことがあります。なるべく早く成果を出してください』

押し殺した声から殺意すら感じる。俺は一寸黙ってから、曖昧に
頷いた。

『私は修平さんではなく、修平さんの中にわずかに流れる、浩平様
と同じ血を信じていますので、私の期待を裏切らないよう、頑張っ
てください。言い訳は聞きたくありませんので、失礼します』

反駁も許さず、一方的にプツツと電話は切れてしまった。

「ありや、完全にキレてんなあ」

杳を怒らすことなど慣れている。しかし、そのままという訳にも
いかない。

「はあ。水瀬さんのような、弟や継母想いの優しい兄もいれば、ウ
チの浩にしてみたいに、弟に心配ばかりかけける兄貴もいるんだからな」
「心配ばかりかけているのは修平の方でしょ。そろそろ観念したら
？」

鈴に肩を叩かれて、俺は溜息を吐いた。

猫も見つからない。浩平も何をやっているのかわからない。これ
じゃ駄目過ぎる。

その日は鈴に牛蒡と砂肝の煮物を作ってもらって美味しく食べた。
明日から頑張るために。

翌日、俺は意を決して浩平を尾行することにした。

正午間近に、杳から連絡が入ったからだ。どうやら、昼休みを利
用してでかけるつもりらしい。

杳は浩平に仕事をたっぱり押しつけられ、足止めをくらっている。
俺は浩平乗るタクシーを愛車のモンキーで追いかけた。タクシー
は小一時間程走って、見なれた街にたどり着いた。鎌倉だ。

タクシーを降りた浩平は、迷いもなく歩きだす。

その先にある場所……実家だ。

俺は直感的にそう思い至り、同時に落胆した。

「家に帰ってただけじゃん……」

バイクを路肩に停め、念のために浩平の後をつけた。

浩平はコートの襟を立てて、寒風の中、目を細めて低く雲の垂れこめた冬空を見上げながら歩く。時折、行き交う観光客を目で追い、実に楽しそうだ。

机の上の書類とばかり向かい合い、息が詰まっていたのだろうか。解放された背中を見て、俺は複雑な気持ちになった。

ずっとワンマンな父親の意見に逆らうことなく、いい子で居続けた浩平。俺はそれを意気地無しだと思っていた。だが、実は兄弟の中で一番大変な道を選んだのかもしれない。浩平を見ていれば、杳が俺に愚痴を言いたくなる気持ちもわかる。

それほど、鎌倉の静かな街並みを歩く浩平は、幸せそうな、解き放たれた顔をしていた。

ぼんやりと浩平の後を追ひ、浩平の視線の先を追う内に、ふと、その姿が消えた。

どこか路地に入ったのかもしれない。慌てて辺りを見渡した。しかし、どこにもいない。

消えた場所から十分も歩かない場所に実家があるのは間違いない。きつと家に帰ったのだろう。昼間なら、父親もいないし、のんびりとお茶の一杯でも飲める。見知らぬ女の所へ通っている訳ではないのだ。好きにさせてやったらいい。

俺は杳に電話をかけ、一部始終を話した。

「ハルカが心配するような事じゃないよ。どうってことないじゃん」
「……………そうですか。良かった」

初めて聞く声で、杳は電話の向こうで溜息を吐いた。その後、いつもの刺々しい声に素早く替わり、

《浩平様の事ですから、大丈夫だとは信じていましたが。それにし

てお意地悪なお方だ。私に一言おっしゃっていただければ、ご自宅
だろうとどこだろうとお連れして差し上げるのに。　ただ、今回
は家に帰られただけ、とうともあります。引き続き、調査をお願い
します」

「まだやるの？」

『はい。　修平さんのこと、ほんの少しだけ、見直しましたよ。
やっぱり浩平様の弟君だけありますね』

沓の最大級の賛辞に、俺は背筋が凍った。気味が悪すぎる。

俺は早々に「じゃあ」と電話を切った。

浩平が嬉しそうに見つめていた、低い空を見上げる。

夏のコバルトブルーに胸をときめかせるのではなく、こんな寒々
しい鉛色の空を心地よさそうに見つめる浩平の心情を考えた。俺も、
すっかりしなくては。浩平にすまない気持ちになった。

バイクまで戻り、ついでにマルを捜してみようとエンジンをかけ
た時、早川真実の家も近いことを思い出した。

美人になったと誉れ高い彼女の顔を見て帰るのも良いだろう。

ふらりと立ち寄った俺を早川はいつもの笑顔で迎えてくれた。

確かに鈴の言うとおりだった。黒かった髪の毛は明るい色になり、
眼鏡もコンタクトにしたようだ。かけていない。

「真実さん、変わったねえ」

しみじみ言うとお茶を出しながら早川は首を傾げた。

「久しぶりに会うからそんな事、思うのよ。でもね、聞いて！三キ
口瘦せたの！」

ウエストに両手を当て、腰を捻る。元々太っているとはいえない
体軀だったが、よりほっそりと女性らしい華奢なスタイルになっ
ていた。

柔らかいシフォンスカートをつまみ、お姫様のように「どう？」

と微笑んだ。

「綺麗になった。うん。すごいね」

「そう？嬉しい！あのね、あと、最近ネイルアートとか興味が出てきて。この仕事だから爪を伸ばす訳にはいけないけど、つけ爪とかしてみようかな、って。鈴ちゃんがしてたパールピンクのネイル、すっごく可愛かったんですよー。フレンチネイルは上品に見えますしね」

「恋をすると、女性は綺麗になるって」

「違います。私、自分の身体とか顔とか、全然いじってなかったから、おもしろいんです。すぐちよつとの変化でも、顔の印象って変わってくるし、化粧はお絵かきと一緒に。洋服やダイエットは人形を造ってるようなものかな。誰かに見せたいから、っていうのではありません」

「水瀬さんに見せたいんじゃないの？」

「それは、また、別！」

顔やスタイルばかりでなく、話し方や雰囲気も明るく女性らしくなった。少し暗くなっていた気持ちが晴れて、俺もつられて笑った。部屋の中も、装飾品が増えて、ざくばらんな雰囲気は変わっていないものの、優しくなったような気がする。

テレビの横には相変わらずホワイトボードがあり、そこに「来客」の文字を見つけた。

「持田さんって、人形を頼んでる人？これから来るんですか？だから、そんな可愛い格好してるって訳？」

ホワイトボードを指差しながら言うと、小さく首を振った。

「これは……。これはね、今、ちよつと水瀬さんが家へ寄ったから」

「入れ違いかあ。見たかったのに」

「お昼休みに抜けてきただけですって。私じゃなくて、人形を見に来たのよ。残念だけど」

そこへチャイムが鳴り、階下から比賀の声がした。案の定、持田という男が来ているらしい。

早川と一緒にドアから顔を出し、階段を覗き込むと、比賀の隣りに壮年の男性が立っているのが見えた。

比賀が俺に手を振り、「そこで持田さんと一緒になったんです。作業場、借りますよ。先生」と、一階の部屋へ消えた。

男は躊躇せず階段を上がってきて、部屋の中央へ座った。あれだけ俺の回りにゴロゴロしていた猫達が一斉に物陰や隣室に隠れてしまった。

鋭い眼光をまともに受け、俺は軽く頭を下げた。猫達と逃げたい。「持田さん、いらっしゃい。この人は、ウチのマルを探してくれている探偵さんなの。それで、こちら、持田寛成さん。ウチのお客様」早川に促されて、持田に名刺を渡した。一応、持っているのだ。しかし、持田は俺の名刺など見もせずに、背広のポケットにしまう。と早川に相好を崩した。

年のころは五十台後半か六十台だろうか。頑固そうところが自分の父親を彷彿とさせる。苦手なタイプだ。俺は完全に眼中にないらしい。

「すいません。俺、お邪魔みたいなので。失礼します」

俺が立ち上がると、早川が慌てて俺の手を引いた。

「あら、どうして？まだいいじゃありませんか。コーヒーだって、まだ飲んでないですよ？」

彼女に他意はないらしい。持田と二人きりになりたくないのではなく、持田の俺に対する嫌悪感を感じていないだけだ。戸惑う俺に、持田が低い声で「座りなさい」と言った。

理不尽だ。こういうのは、好きじゃない。

「久しぶりにお会いして、悩みがなさそうなのは良かったですよ」不機嫌のあまり、嫌味が出た。俺の悪い癖だ。それも早川には通じなかったようで、笑顔のまま、「そうね」と微笑んだ。

「ええ。でも、私も好きな人がいる身ですからね。悩むことだっていっぱいありますよ。そう。持田さんに聞きたかったんですけど、男の人って、会社の女の子を呼び捨てにしたりするかしら？持田さ

んも、秘書の子を呼ぶときに、名前で呼んでいました?」

「どういうことかな」

「水瀬さんが家へ来ているとき、携帯がよくかかってくるんですよ。その時の相手の人がどうも女の人みたいで。どなたですか?」って聞いたら、秘書ですって言うの」

「カノジヨなんじゃないんスか?」

俺の横槍に、早川は子供のように頬を膨らませた。

「水瀬さん、彼女はいないって言ってたもん!」

持田は彼女の問いには答えず、肩に手を置いて話題を変えた。

「それよりも、私のキヨコはどうかね? 期日には間に合いそうかな?」

「ああ、それは」

持田の興味は水瀬某などではなく、自分の人形のことなのだ。キヨコの話をし出した二人を置いて、俺はそうつと階下へ逃げた。

作業場では、比賀がボンヤリと煙草をふかしていた。

「ここ、禁煙じゃないの?」

「うわあ、びつくりした。え? なに?」

飛び上がって俺に向き直った比賀は、今日は黄色の長髪を一つに結わき、その髪束が勢い余って振り返った比賀本人の頬に音を立てて当たった。

「ウケ過ぎつすよー。修平さん。あー。マジ、びつくりした。え? なに? もうお帰りですか?」

比賀は、笑う俺に咥え煙草のまま椅子を勧めてくれた。

「本来のお客様が来ちゃったからね。逃げてきた。なんか、苦手なんだ。ああいう管理職タイプ」

「あのくらの年齢のオヤジなんか、あんなもんじゃん? でも、骨董級に堅物。マジメでさ、俺のこともあんまり良く思ってたねえんじゃないかな。今日も、『なんだ、そのふざけた格好は』っていきなり怒鳴られた。人形を造るのに、格好なんか関係ねえっつーの」

「それで不貞腐れて、煙草を吸ってたわけ？」

「ま、そんなところかな。あのオッサン、昔は土建関係の小さい会社の社長だったんだって。金は持つてるけど、使い道を知らないんだよね。全然遊ばずに年ばかり経っちゃったパターン」

「そういえば、例の水瀬さんって人も社長なの？さつき真実さんが言ってたんだけど？」

早川の言葉を思い出した。秘書を持っているとすれば、かなり大きな会社だろうか。

「俺もよく知らねえけど。着てるもんとかは、高そうなの着てんねー。俺も電話に出てんの、見たことあるけど。確かに相手の女の子には、命令口調だったからなあ。そういうプレイ？」

「違うと思う」

何プレイだ。

「どうして、修平さん、水瀬さんのことそんなに気にするんスか？」
「性分？探偵としての。っていうと聞こえがいい？うん、本当は、なんかさ。聞いたことある気がするんだよねー。水瀬さんって名前」
「ふうん。本当かよ。上手く逃げただけじゃん？ま、そういう事にしといてやるよ」

比賀と顔を見合わせて笑った。

早川の顔を見るといって、当初の予定は叶ったので、そのまま挨拶せずに帰途に着いた。

その夜、早速、浩平に電話をかけて日頃の労をねぎらうと、兄はとても嬉しそうに「ありがとう」と言った。

「修平が喜べば、それが一番嬉しい」と言った兄の言葉の意味がようやくわかった気がした。

4 水瀬の正体

マルの搜索を開始してから、はや数週間が経った。

そろそろ限界を感じていた俺は、広域調査に乗り出し、その日はモンキーで、遠く江ノ島の方まで足を伸ばしていた。

そして、マルを見つけた。

マルは早川の家から遠く離れた町の廃屋の中に、つながれたまま、死んでいた。

安物のビニール紐が首に食い込み、やせ細った姿は、彼女から預かった写真の幸せそうなマルとは別の猫のように無残だったが、腹にある丸い模様や身体的な特徴、そして首輪が、その猫をマルだと示していた。

俺は紐を切り、着ていたジャケットでマルを包んで廃屋から運び出した。情けないことに、涙が出た。

前カゴにマルをそっと入れ、唇を噛み締めた。憤る俺に、通りかかった女性が声をかけてきた。いい大人が泣いていたからだろうか。「その廃屋に、この子が死んでいたんですが。いつからいたか、ご存知ですか？」

「ああ、それねえ」

女性は眉根を寄せて言葉を続けた。

「近所の子供たちじゃないかしら。可愛いからって、つないでおいただのね。きつと。ずいぶんと前からニャーニャーうるさかったもの」
目の前が暗くなった。なぜ、助けない？うるさかったなら、覗いてみればいいじゃないか。

一瞬、殴りかかりそうになって自制した。彼女がマルを殺した訳じゃない。否。彼女を含め、知らぬ振りをしていた大勢の人間に、マルは殺されたのだ。悪いのは、マルをつないだ子等なのは間違い

ない。しかし。助かる方法もあつただろうに。

俺は耐え難い脱力感に襲われ、モンキーにまたがった。
とにかく、早川にマルを返さなくては。

バイクで風を切る間、俺は自分の無力さにも幻滅していた。俺がもつと早い内に見つけていれば、こんなことにはならなかったかもしれないのだ。

家に到着し、何も言わずに早川をバイクの前まで連れて行って、マルを引き渡した。かける言葉が見つからなかった。

早川の大きな瞳から、涙が幾つも溢れてきた。震える手で、マルのやせ細った身体を撫でる。

「どうして」とも問わない早川に、経緯を途切れ途切れに話した。「可愛いから？可愛いから、殺されたの？模様が珍しいから？でも、そんなのマルのせいじゃない。だいたい、マルは首輪もしていて、飼い猫だつて一目瞭然じゃない。この子を待っている人間がいるってわかるのに、どうして、こんなヒドイ事をするのかなあ。許せないっていうより、悲しいよ」

俺はその場を早々に立ち去り、事務所のソファに倒れ伏した。何も喉を通らなかったのは、贖罪ではなく、自己欺瞞だと自分でもわかった。

一週間後、早川から電話があつた。

マルを包んでいたジャケットを返したいと言うのだ。それに、こんな形でもマルを探し出してくれ礼がしたいと。

俺はバイクを飛ばして鎌倉の家へ駆けつけた。

訪ねると、早川は作業場で手を真っ白にしながら、人形に和紙を貼っていた。

洋服は愛らしいワンピースだが、エプロンをしてやる気十分といった感じで、思いのほか元気そうな姿に安堵した。

「今、手を洗いますから、ちょっと待ってて下さいね」

俺はいつもの丸椅子に腰を下ろし、きびきび動く早川を目で追った。

「時間がかかってしまつてごめんなさいね。すぐに返したかったんだけど、クリーニングに出したら、なかなか仕上がらなくて」

真実からビニール袋に包まれたジャケットを受け取る。クリーニングに出してもらつたようなジャケットじゃないのに。どうせ、草臥れた安物だ。思わず恥ずかしくて下を向いた。

「修平さんには本当に感謝しているのよ。マルがあんな姿になったのは、決して修平さんのせいじゃないって事だけは、ちゃんと覚えておいてくださいね」

「でも、もつと早く見つけてれば……」

「そんな暗い顔しないで！ そうだ、修平さん、猫が好きだつて言っていたでしょう？ 私、ウチの猫達をたくさん撮つたの」

ポケットから使い捨てカメラを取り出し、いきなり俺の顔を撮つた。明るい声で笑う。

「まだ、あと三枚くらい撮れるわね」

「……それじゃあ、真実さんを撮らせてくださいよ。レイと一緒に」俺の足元でグルグルと喉を鳴らしていた、黒猫のレイが同意の声を上げた。

「レイと？ いいけど。この子ねえ、ホントに頭にくるの。水瀬さんに全然なつかないんだもん。男の人でレイを抱っこできるの、修平さんだけなんですよ」

「だからさ、いいじゃん。そのエプロン姿で。いかにも人形作家ですつて感じだし。レイを抱っこした写真が欲しい。写真嫌いなのは承知してますけど？」

「うふふ。仕方ないか。いいですよ。レイ、いらっしやい」

レイを胸に抱く早川の写真を数枚撮り終え、そのまま、使い捨て

カメラを貰って帰ることにした。

帰り際、こんなことを言った。

「修平さん、心配しないで。私、結構幸せだから」

水瀬との事を言っていたのだろう。

その言葉が妙に胸に残った。

数日後。使い捨てカメラの写真が出来上がったのと、契約より多目の金額がずいぶんと前に振り込まれていたのに気づき、早川の家で電話することにした。

呼び出し音は一回ですぐにつながった。一瞬、不審に思って受話器を握り締めた。

『どちら様でしょうか？』

比賀ではない、男の声。俺が相手の名前を確認すると、確かに「早川です」と言う。

「あの、竜塚と申しますが……。真実さんは？……？」

最後まで言うことが出来なかった。言葉尻にかぶるように、相手の男が声を上げたのだ。

『竜塚さん？え？どうして？マジですか？……あ、あの、俺です。』

県警の。篠原大和です』

「篠原さん？どう……して……」

電話の向こうの篠原大和という男は、俺がたびたび事件解決の時に世話になっている、神奈川県警の若いエリートで、殺人を扱う課に所属している。彼が巡回勤務などするはずもなく、すなわち、早川真実の身に何かあったという事だ。

冷や汗が背中を伝い、目の前が俄かに暗くなってきた。

「どうして、篠原さんが、そこに？」

答えを聞きたくなかった。だが、篠原は声を低くして耳を覆いたくなることを言った。

『早川真実さんが殺害されたので、先発隊として、いつものように現状に来てます。竜塚さんこそ、早川真実さんとはどういった関係ですか？』

途中から、篠原が何を言っているのか理解できなくなっていた。

「真実さんが、なんだって？」

『早川真実さんが殺害されたんです。発見されたのは今朝の九時ごろ。自称弟子の男性がこの家に来て見つけました。被害者と面識があるなら、いつものように知恵を貸してくださいよー』

「真実さんが？」

『殺されたんです！どう考えても現場の状況から自殺及び事故死ではありませんので！』

篠原の「殺された」という言葉で、突如、意識が鮮明になった。

驚いてばかりはいられない。誰かが彼女に手をかけたのなら、犯人を捕まえなくては。むろん、俺に逮捕の権限はないが。息を大きく吸い込んで、頭を切り替えた。

「犯人の目星はついているんですか？」

『うーん。それが、発見してまだ間がないですからねー。検視結果とか上がってきてないし。でも、早川さんと交流があった人物の中で連絡が取れない人がいて』

篠原は、「あ。本当だ。竜塚さんの名前もある」と笑った。相変わらず場の空気を読まない男だ。

『猟奇殺人って可能性もあるんで、最近関わりがあった人をピックアップ中なんですけどね、どうも、水瀬という人物が、これ、偽名っぽいですよ』

「水瀬さんは、真実さんが好きだった人で、社会的地位の高い、立派な人って聞いたけど」

『痴情のもつれかな。で？竜塚さんはどうします？現場、見に来ますか？』

「良いんですか？」

『ダメって言っても来ちゃうでしょ。協力しないって言うても知り

たがるでしょ。特例ですから。どうぞー」

「それじゃあ、バイク飛ばして、今からすぐ行きます」

電話を切ったその手で、風宮鈴の携帯電話の短縮番号を押した。

先ほどとは対照的に、ずいぶん待たされた後、鈴が出た。

「鈴、大変な事が起きたんだ！」

「こつちだつて大変なのよ！お姉ちゃん、さつき分娩室に入ったの」

「星絵ちゃん、生まれそうなのか？」

「うん。今、病院。お母さんも側にいるわよ」

他方では人が死に、他方では生まれようとしている。おめでたい雰囲気、風宮母子に、陰惨な殺人事件の話をするのは、いかなものか。

躊躇する俺に、鈴が先を制した。

「それで何？何が大変なの？ やっぱいい、は、なしだからね！」

「…………… 真実さんが、亡くなったんだ」

「真実さんが？亡くなったって、どうして？」

「殺されたらしい。今、真実さんの家に電話をしたら、篠原君が出てさ。俺、真実さんの家に行くてくるから」

「やだ、ちよつと！私も行くわよ！」

「でも、星絵ちゃん、生まれそうなんだろ？」

「初産の場合、そんなに早く生まれないわ。それに、ここにいたってお姉ちゃんの手伝いは出来ないもの。いい？私が行くまで待っていて！車を飛ばしてくから、事務所の下で拾うわ。くれぐれも、一人で行ったりしないでね。わかった？修！」

電話は派手な音と共に切れた。

俺は鈴が来るまで落ちつかず、動物園の熊のように事務所内を行ったり来たりして待った。

星絵の病院から、この事務所までは車で二十分もあれば着く。果てない時間に思われた二十分は、文字通り果てない時間を経て、ビルで待っていた俺の前に、濃紺のミニクーパーが滑るように止まった。

「乗って、修平！」

俺は無言で助手席のドアを開けた。助手席の上に、鈴の鞆が無造作に投げ出されていたので、その鞆を抱えて座った。

「飛ばすわよ？ちゃんとつかまってる！」

「事故るなよ。それと、星絵ちゃんの方は大丈夫なのか？」

鈴は前を向いたままニツコリと笑った。

「お母さんがついてるから大丈夫。嫁ぎ先の病院で産むんだし。それより、真実さんの方はどうなの？殺人って断定された訳？篠原さんは何て？」

「現場の状況から推察するに、殺人と言う線は間違いないって。それと、水瀬さんが偽名を使っていたらしくて。どう思う？」

「偽名？何だよ。怪しいわね」

言いながら、力が入ったのかグンと車が加速した。対応しきれず、頭をシートにぶつける。おまけに、鈴の鞆まで落としてしまった。

拾おうと手を伸ばすと、鞆の中から小冊子がポロリと出てきた。

手に取り、への字口で鈴に迫った。

「何、これ？」

「お姉ちゃんの母子手帳。万が一、スピード違反で捕まっても、緊急事態ですって切り抜けられるかと思っ」

「おまえなあ……。そんな言い訳が警察に通じる訳ないだろ。だいたい、今から子供が生まれる星絵ちゃんの母子手帳を持つてきちゃってどうするんだよ。しかも、生まれそうな母親が運転してて、父親は鞆を抱えて助手席か？」

「だ、誰が、修平に父親役を演れて言ったのよ！アンタは私の兄役に決まってるでしょ！」

「それは申し訳ありませんでした。どっちにしても、くれぐれも安全運転をお願いしますね」

自分で運転ができない以上、黙って従うしかない。

それにしても、他人の母子手帳なんて初めて触った。実家には自分の母子手帳が未だに保管されているのだが、小さくて黄ばんでい

て、それが現役で活躍していた頃など想像できない。

物珍しくてよく見ると、B6判の小冊子の表紙はパステルカラーでおもちゃの絵が描かれており、イラストの下に母子名の記入欄がある。そこには『風宮星絵』の上に二重線が引かれていて、隣に『山本星絵』とあった。

ちょうど信号で止まったため、鈴は母子手帳を横目に見て「ああ」と顎を引いた。

「各都道府県の知事が妊娠の届けがあり次第、発行するんだけどね。それ。ウチのお姉ちゃん、できちゃった結婚だったでしょ？しかも最初はシングルマザーをやるつもりだったから」

「でも、相手の人が妊娠を知って結婚を承諾したって言っていたっけ。後から籍を入れたから、旧姓の横に新しい名前なんだ」

「女性は結婚すると名前が変わっちゃうからね。夫婦別姓だって浸透してないし。修平のお母さんだって、生まれた時の名前を返上して、竜塚になったんでしょ？」

「母さんの旧姓？」

ずっと心に引っかかっていた糸くずが、また胸の中で渦を巻き始めた。なぜか感じていた疑問。

「修平のお母さんって、旧姓は何て言うの？」

鈴の質問で、身体が凍りついた。

思い出した。どこかで聞いたような気がするのと、訝っていたことを。

「母さんの旧姓……水瀬だ」

「水瀬？それって……」

「浩平が、容疑者になってるかもしれない」

さすがに急ブレーキを踏みはしなかったが、鈴が動揺して「何かの間違いじゃ……」と呟いた。

だが、思い返せば、それでつじつまが合う。

水瀬の顔を知る比賀に、俺と水瀬が似ていると言われたし、水瀬が造らせている人形も俺に似ている。おまけに、人形の名前は「シ

ユウ」だ。

「浩平を尾行した時、実家の付近で見失ったことがあったんだ。俺は家に帰ったのかと思っていたけど、真実さんの家に、自分の人形を見に行っていたんだと思う」

どうして気付かなかったんだろう。実家と早川真実の家は近い。あの時、ちゃんと家に帰って確かめていたら、と思うと、悔しさがこみ上げる。

「でも、偽名まで使って修平の人形を造ってもらうなんて変じゃない？薬王院さんにだって内緒にしておくことないでしょ？」

「そこがポイントだよ。浩平はハル力が俺ばかりを贖身するのを嫌ってるって知ってるんだ。俺の人形なんか発注したら、ハル力に何て言われるか」

「でも、修平は死んでいないじゃない。どうして、そんな人形なんて造る必要が？」

鈴の疑問には答えず、俺は急いで携帯電話を出して、浩平に電話をかけた。もしかしたら、警察から連絡が行っているかもしれない。くだらない杞憂で終われば構わないが、万が一という事もある。気が急いた。

咄嗟に浩平の携帯電話ではなく、会社の社長室にかけてしまったので、浩平ではなく杳が出た。

「浩平は？浩にいはどうした？」

勢い込んで言う俺に、杳は「フン」と鼻を鳴らした。

「今、席をはずしておいでです。何か御用ですか？」

「何か、変な電話とかかかってきてない？ええと、警察から、とか『おやおや。何か警察の御厄介になるような事をしましたか？』」

杳の話す遠く後ろの方で、携帯電話が鳴った。呼び出し音が途切れた数秒後に、浩平の声で「なんだって？」と叫ぶ声が聞こえた。言っている側から、警察からの確認電話が入ったらしい。

「ハル力、よく聞けよ。詳しい説明をしている暇はない。とにかく、

浩平が警察に事情聴取されるかもしれない事態が起きた。俺は浩に
いを信じているから、決して悪いようにはならないと信じている。
俺が心配なのは、お前がキレて、警官を殴ったりしないかだ。頭に
血が上って、浩にいの不利になるような事は絶対にするなよ」

『……………何を、言ってるんですか？』

「もう少ししたら、警察官が会社に来るだろうから、おとなしく任
意同行に応じろって事だ。下手に騒ぐとお前まで引つ張られるから
な。また連絡する」

すぐ目の前に真実の家が見えてきたので、電話を切って鞆にしま
いなおした。

杳が動揺した声で何か言っていたが、聞かなかったことにした。
伝えねばならないことは言っておいたのだ。

「修平、着いたわよ」

出陣の合図を送るかのように、鈴が毅然と言った。

閑静な住宅地には似つかわしくない物々しい状況になっていた。
あちらこちらにロープやテープが張られ、紺色の制服を着た鑑識官
が忙しなく出入りしている。

鈴の車を見つけて、篠原大和が手を振った。

細身の体躯に、高級そうなブルーグレーの背広をピシッと着こな
し、警察官にしてはやや長めの髪をかきあげて、殺人現場だとい
うのに笑顔で会釈する。

俺はいつものように手を上げ、「どうも」と言った。

「早かったですねえ。えつと、ちよつと中はまだ……………」

篠原は玄関ドアに手をかけた俺の手を引いて、庭へと促した。鈴
も俺の後ろについてくる。

冬枯れして、寒々しい庭の中央に立ち、篠原は「さて」と手帳を
開いた。

庭から作業場を覗き見たが、シートが張られていて中の様子がわ
からない。

ただ、警察官に交じって、黄色い頭が右へ左へ動いていることから、どうやら比賀がいるのは確かなようだ。

俺の視線をたどって、篠原が頷いた。

「第一発見者は彼です。比賀俊一。美大生だそうで。何から話したらいいですかね？何を聞きたいですか？」

「殺人と断定された理由は何ですか？」

務めて冷静な声を出そうとしたが、上手くいかなかった。そんな俺を篠原は目を細めながら見て「じゃあ」とゆっくり語りだした。

「順を追って説明しましょうか。えっとね。まず、発見されたのは今朝の九時。死亡推定時刻および死因はまだ剖検の結果待ちということ、詳しくは不明です。すいません。どうも、頭を殴られ後、首を絞められてますね。凶器は被害者宅にあった花瓶と、被害者が首に巻いていたスカーフ、かな。金品を盗まれた様子も、争った形跡もないことから、顔見知りによる犯行とみてます。ただ、死体を損壊するやり方が、ちよつと、アレなので。まあ、痴情怨恨か、精神異常者による猟奇的な犯行でしょうかね。事故と自殺はありえません。……と、いう具合です」

「死体の損壊って、何があったんですか？」

「俺も驚いたんですけどねー。被害者の早川真実さんは死後、殺害現場となった二階のリビングから下の作業場まで運ばれ、そこで、爪を抜かれ、髪の毛を切られ、衣服も脱がされて、人形を置いている台の上で、人形にかぶせていた白い布に包まれていました。あ、でも、暴行の形跡はありません。それで、被害者の爪や髪の毛は、人形の腹の中から発見されました。なんか、不気味でしょ？」

絶句した俺の背中に、鈴がぎゅつとつかまった。

何の目的で、そんな残忍な事をするのだろうか。

「俺にコワイ顔しないでくださいよ。こつちも聞きたいことがあるんだし。あの、水瀬という人物の正体がわかったんですけど、修平さんはご存知ですか？」

「……すいません。俺の、長兄です」

「やっぱりー。そうですよね。竜塚なんて変わった名前、そういるもんじゃないと思ったけど。そっか、お兄さんでしたか」

「浩平さんが第一容疑者ってこと？」

ようやく鈴が声を上げた。篠原の両手を取って、激しく揺さぶる。首を横に振り、「違うわよね」と呟く。

篠原は、鈴をなだめながら、肩に手を置いた。

「容疑者ではなく、重要参考人です。たぶん署に御同行願って、色々とお聞きする予定ですけど、失礼がないよう、配慮します。なにせ、トップ企業の社長さんですからね。ウチの署長ともお知り合いだそうで。修平さんのお兄さんってだけでも、少しは待遇が良くなりますよ、きっと」

俺は馴れ々しい篠原の手をピシヤリと叩いて、不安そうな鈴の背中を撫でた。

「どうして兄が怪しいと？偽名なんて使ってたからですか？」

「いや、普通に考えて、一番怪しいでしょ。痴情怨恨、恋愛のもつれ。比賀俊一が言うには、早川さんは修平さんのお兄さんを好いていたそうで……なんて。俺はそんな単純な話じゃないと思ってますけど。偽名については、ご本人に真意を教えてもらいますよ。それからです」

「兄の秘書に、任意同行には応じるようにと電話をしておきました。疚しい事がなければ、捜査には協力するべきですから」

篠原は何度も頷いて「どうも」と言った。目が合うと、切れ長の細い目をより細くしてニツコリと笑う。

しばらく沈黙の時が流れ、頭上を鳶が旋回していった。海が近いからだ。

高く澄んだ空を仰ぎみると、猫が俺の足元にすり寄ってきて、悲しい声で鳴いた。

猫はレイだった。篠原が先んじていきなりしゃがみこみ、レイに手を伸ばす。

「君、美人だねえ。名前は何て言うの？」

レイは篠原の手をすり抜けて、俺の顔を見上げる。なおも追いかけようとする篠原に、「猫、好きなんですか？」と一応尋ねると、猫のような顔になった。

「猫好きっていうより、猫バカですよ。残念。この子、人を見ますね。修平さんが好きみたいだ」

レイは尻尾をひるがえして逃げていった。その後ろ姿を見送って、篠原が「さて」と腰を上げる。

「現場とかは、そのまんま。だと、思います」

篠原は「たぶん」と付け加えて、庭から籐椅子の置かれたサンルームを通り、乱雑な作業場へと入った。むろん、俺達も後に続く。

作業場には先ほどの警察官たちも比賀も、鑑識官も誰もおらず、妙にガランとしていた。

日ごろ、比賀が人形の土台と格闘していた作業台はきれいに片づけられ、後ろを振り返ると、人形が陳列してあった台に色々な白文字が書かれていた。警察官が捜査のために書いたものらしい。

篠原は、人形の陳列台の一つに歩み寄り、見本品の人形にかぶせられていた布をはがした。

「こういう白い布に、早川さんは包まれていたんです。あとね、彼女の爪や髪の毛がねじ込まれていた人形は、鑑識が持つて行っちゃってますけど、確か、シユウという名前の人形だそうです」

「俺の腹の中に入ってたって言うんですか」

篠原に、兄が俺の人形を造らせていたと言うと、頓狂に声を上げて関心を示した。

「奇妙な兄弟ですねー。本物、いるのに。だって、小さい子の人形でしたよ、あれ」

見たのだろう。しきりに「ふうん」と呟いて、はたと顔を上げた。「すいません。じゃ、上を見ましようか。ここ、目ばしい物は押収されてます」

細い階段を上がり、部屋へ通じるドアを開けた。こちらには、まだ数人の私服刑事達と比賀がいた。刑事は篠原に目をやり、左右にわかれる。

刑事達の動きにつられて、比賀がこちらを向いた。

覇気がなく、蒼白な顔で、目を真つ赤に腫らしていた。

俺の顔を見て、「修平さん」と駆け寄ってきた。

「比賀君、しっかりして」

「修平さん、先生が、先生が！俺、どうしたらいいんですか？先生が！」

混乱した比賀を抱き寄せ、背中を叩いた。比賀は嗚咽を漏らし、しがみつきながら号泣した。

篠原を除く刑事達が皆、不躰な目で俺達を見ていたので、輪から外れて座った。鈴も比賀の肩をさすって、涙交じりに「大丈夫？」と呟いた。

「ゆっくりでいいから、今朝の様子を聞かせてもらえないかな」

ひとしきり泣いて落ちついた頃を見計らって、極力優しい声で促してみた。比賀は抵抗もせず、口を開いた。

「今朝九時頃に来たら、玄関の鍵が開いてて……。変だな、とは思ったんすけど。下から先生を呼んで。返事がなかったけど、二階のドアのカギは預かってなかったし、そのままやるつもりで作業場に入って。そんなの、いつもの事だったし、作業場の鍵は持つてるしでも、作業場も鍵が開いてたんす。変だな、変だなんて思いながら見渡したら、工具がぶちまけられてさ。いくら片付けが嫌いな先生でも、道具をしまわないのは怒る人だから、見つかったら俺のせいにされるかも、って慌てて片づけて。ペンチとか拾いながら、人形の陳列台を見ると、一体、人形が増えてたんだよ。それで……。一体、白い布を剥がしていったら……。最後に、先生が……」

そこから先は、声が詰まって言葉にならなかった。

比賀は唇をかみしめ、拳を何度も自分の太ももにぶつけた。

「そうか。辛かったね……。昨日はここへは来なかったの？真実さ

んに変わった様子とか、なかった？」

「俺は昨日、昼まで寝ていて、サークルの先輩と二時くらいから、横浜の美術館へ行つて。それから、先輩の友達と数人で夜遅くまで飲んだ。だから、昨日一日、先生には会ってねえ。変わった様子ってなんだよ！あんなことしたの、誰だよ！」

唐突に激昂した比賀を必死でなだめながら、昨日の二時頃まではアリバイがなかったのかと思った。性分とはいえ、俺は酷い性格をしているな。

「修平さん、ちょっと……」

そこへ、篠原の声がかかった。俺は立ちあがって、比賀を鈴に任せて篠原の側へ寄った。

「今、竜塚浩平さんへ連絡を取っている同僚から電話がありました。どうも、お兄さんは修平さんがいないと、何も話したくないと言つて動いてくれないみたいなんです。お手数ですけど、俺と一緒に竜塚グループ本社まで行っていただけませんか？」

「願ってもないことです。兄がわがままを言つて申し訳ありません」
たぶん、浩平は偽名を使っていたことや、俺の人形を内緒で造っていたことへの言い訳がしたいのだろう。

杓と俺を同席させて、面倒のないようにしたいのだ。長い付き合いだから、考えている事くらいわかる。

俺は鈴を呼び、比賀に気を落とさないよう励まして、東京大手町にある、本社ビルへ向かった。

周囲の巨大ビルが立ち並ぶ一角に、竜塚グループの本社は威風堂々とあった。こちらが気後れするほど、偉そうなままだった。このビルに臆することなく入れる日は来るのだろうか。何度来ても、心が折れる。

しかし、今日は警察官である、篠原大和刑事が一緒なため、篠原の後ろを歩いて、最上階にある社長室へと難なく進めた。

最上階のフロアは数部屋の個室があるが、すべて社長専用の部屋で、エレベーターが開くと、フカフカの絨毯と、険しい顔の薬王院杳が出迎えていた。

「こちらです。浩平様がお待ちですので、どうぞ」

杳に促されて入った部屋は、VIP専用の応接室で、豪華な革張りの応接セットが部屋の中央に鎮座していて、壁には高級そうな絵画が飾られており、コーナーテーブルの上には美しい薔薇が高そうな花瓶に負けじと咲き誇っていた。

応接セットの一人用の椅子に、我が長兄、浩平が座っていた。

その浩平が、俺の顔を見るなり飛び上がって力任せに抱きついてきた。のけぞって、ドアに頭を打ちそうになった。こらえるのに足を踏ん張らなくてはいけなかった。クラリスがルパンに再会したときのように、大の男が思いつきり飛んでくると、かなり怖い。

しかも、警察に事情を聞かれているこの状況を不安がり、身内の俺を見て安堵したのかというと、予想に反して……いや、予想通り、ただ単に俺に会えた嬉しさを身体いっぱい表現しただけだ。

呑気に「痩せたんじゃないか？修平？」などと俺の顔を撫でまわす。

この状況に、俺と杳以外のすべての人間が口を開けて驚いた。さすがの鈴さえも。

浩平の隣のソファに座っていた刑事などは、目を白黒させて、それまでの浩平とのギャップに苦しんでいるようだ。なんだか、申し訳ない。

「修平、金曜日に送ったケーキ、食べた？晩御飯にしたとか言うなよ。お兄ちゃん、怒るからな」

なおも、俺の頭を撫でようとする浩平を引きはがし、ソファに座らせて空気を変えるために咳払いをした。

「食った。美味かった。ありがとう。でも、そうじゃなくて。俺の人形を造らせてたってどういう事だよ。言い訳したくて、俺を呼んだんだろ？」

「この一件に絡んで修平を呼べば、来てくれるだろうと思ったんだ。それに、早川さんと親しかったとか、お兄ちゃんだって聞いてないぞ」

「『聞いてない』はこっちのセリフだ。まったく。ほら、さっさと白状しろ」

ようやく場が取り繕われ、めいめいソファに座りなおした。

杓が俺と浩平と一緒にするのを嫌がる原因の一つがこれだと思う。浩平は俺に対しては、豆大福に黒蜜たっぷりかけて、クッキーで挟みました、みたいに甘く、それまでの二枚目から一枚多くなって、完全に三枚目になってしまう。

エグゼクティブなデキるビジネスマンであるところの、格好いい浩平社長を崇拜する杓には、相当痛いはずだ。たぶん。今も、目頭を押さえて辛そうにしている。泣いているのかもしれない。

俺は溜息を吐いて、突き刺さる杓の視線から耐えた。

「それでは、まずは早川真実さんとのご関係からお聞かせいただけますか？」

埒が明かないと思っただのか、篠原が身体を乗り出して、もっともな事から始めた。

浩平は背筋を伸ばし、途端に顔がキリッと引き締まって、いわゆる営業用の声で答えた。

「人形の制作を頼んでいたの、アーティストと顧客。です」

「偽名を使って、早川さんに近付いた理由は？」

「作っている事を誰にも知られなくなかったからです。秘書の杓にも、修平本人にも。二人にバレたら、邪魔されるに決まっていますからね」

杓がたまらず、口をはさんだ。

「わ、私は、浩平様のなさりたいことを妨害するなんて！そんな、

失礼極まりない事はいたしません！」

みんなの視線が唇を噛む杳に集中する中、浩平は妙に可愛い声で「うん」と頷いた。

「でもさ、絶対に嫌がるだろ？これは会社の金を使わない、プライベートな趣味だから、杳を煩わせたくなかったんだ。杳、気を悪くした？」

浩平に見上げられて、杳の顔は真っ赤になった。

拳を握りしめ、勢いよく首を左右に振った。

「め、めっ、滅相もございません！」

今時、「滅相もございません」なんて言う奴、いないよな。と、その場にいる全員が思ったに違いない。

「コホン、それで、どうして存命されている弟さんの人形を？あの早川という人は、死んだ人の人形しか作らんのでしょう？」

篠原の隣の中年刑事が咳払いをして元へ戻した。

「そうよ。しかも、浩平さんたら、幼いころの修平の人形を作ってもらっていたんでしょう？作り話まで用意して」

鈴の意見に、浩平はまたも素直に「うん」と言った。

「弟が死んだという話を造ったのは、その方がやりやすいと思ったからだし、彼女は死んだ人の人形ばかり作っていた訳ではないよ。離れ離れになった人の人形も作っていた。だから、最後の最後で、ちゃんとご説明した。嘘はよくない。うん。そうだろ、修平？」

「じゃあ、最後に真実さんに本当の事を打ち明けたのか？」

「まあね。彼女に『結婚を前提にお付き合いしてほしい』って言われたから、『貴女を騙していた俺でも良いとおっしゃるのですか？』って」

「初耳です！浩平様！」

「誰にも言っていないから。杳が知らなくても当たり前だよ。そういう顔をするから嫌だったんだ」

刑事の目の色が変わった。警察側は浩平が犯人だと目算を付けているのだから仕方ない。

俺は浩平の肩に手を置いて、顔を覗き込んだ。

「それで、浩にいはなんて言っただよ」

「『考えさせてください』って。いきなり『こちらこそー』なんて言えないだろ。彼女は『待ちます』って言ってたよ」

篠原が静かに質問する。

「早川さんを愛してはいなかったんですか？」

「愛してる？俺が愛しているのは、この会社と仕事と、一番大切な家族だけだ」

「では改めてお尋ねしますが、どうして弟さんの人形を？我々は、死んでもいない弟の人形を造らせていたという点が非常に気になるんです。それに託けて彼女に近づき、親しくなりたかったのではありませんか？そして、彼女に受け入れられず、殺害した。彼女を以前から知っていて、機会を待っていたとか？」

浩平に詰め寄った先の中年刑事に、杳が凄い目で睨んだ。

今にも殴りかかりそうな杳を、浩平は片手で制して涼しい顔で言った。

「彼女を知ったのは、仕事上の知り合いに教わって興味を持って。一年半ほど前にお電話したので、その時に話したのが初めてかな。人形作りの順番が回ってきたから、お願いした。というだけです」

「それでは、その時に好意を寄せて？」

「少々恥ずかしいという気持ちがある自分にもあったので言えませんが、面倒なのではつきり言います。弟の人形を造らせたのは、修平が事務所を開業してからそちらに寝泊まりするようになり、帰ってこなくなっただけでした。二十二年前に母が亡くなって以来、掌中の珠のように慈しんできた、最愛の修平に会えない日々は、本当に辛かった。だから、リビングに修平の人形を座らせてこうと思ったんです」

「……なぜ、少年時代の人形を？」

「小さい方が安いからです」

啞然とした。いや、絶句した。

俺一人が、浩平らしい飄々とした物言いがおかしくて、ゲラゲラと腹を抱えて笑ったが、みな一様に目を点にして、しばし空気が凍った。

それでも、俺を見つけた時の、浩平の豹変ぶりを目の当たりにした以上、浩平の言葉を信用したらしく、その奇行も腑に落ちたらしい。刑事達はブツブツと口の中で不満を呟いていたが、一応は納得したようだった。

「わかりました。それでは次に、昨日の行動を教えてください。会社は休みでしたね？」

「そろそろ人形が出来上がるというところで、前々日の約束通り、朝十時に早川さんのお宅を訪ねました。二階へ上がってお茶を飲んで早川さんに『結婚を前提に付き合ってほしい』と言われ、先ほど申し上げた通り、本名やら嘘についていた事を詫びました。悪いと思ったので、会社の電話番号や、いなかった時に困ると思って沓の名前を教えて。昼食と一緒に誘われたのですが、女性から真面目な顔でそんな事を言われたことがなかったので、少々焦りましてね。飯を食う気になれなくて、ご辞退しました。出るときに時計を見たので、十一時四十分だったのは確かです。そのあと、気分転換にブラブラと小一時間程度歩いて、いつも行く喫茶店で軽食を摂りました。それで……」

浩平の言葉を継いで、沓がテキパキと答えた。

「今度、都内にある当社のホテルのレストランが一新するので、そのレストラン選考のための食事が夕方からありました。ですから私が頃合いを見計らって、午後二時三十分には喫茶店モカへ車でお迎えに上がりました。その後は夜十二時過ぎにご自宅へお送りするまで、私や社のスタッフが浩平様のアリバイを証言できます」

「逆に、喫茶店へ行くまでのアリバイがないんだな？それに、最後に被害者に会っているのはアンタってことになる」

「言葉に気をつけた方がいいですよ、宮本さん」

篠原が中年刑事に耳打ちをした。ちらりと送った視線の先には、杳が鬼のような顔で仁王立ちしていた。金棒を持ったらさぞかし似合いそうだ。

宮本と呼ばれた刑事は、ぱつが悪そうに手帳を閉じ、「まあ、追々わかってくるだろう」と捨て台詞を吐いた。

それを聞いて、俺は心がざわざわと落ちつかず、浩平の目を覗き込んだ。

「最後に聞きたいんだけど、浩にいは、真実さんを殺してないよな？」

浩平は垂れ下がり気味の目じりを一層垂れさせて、柔らかに微笑した。

「そんなこと、してない。だって。したら、修平が悲しむだろう？」

その言葉は、どんな告白よりも浩平の人間性が現れていて、疑う余地がなかった。

俺も杳も、たぶん鈴木も、浩平が犯人でないことは確信している。ただ、本人の口から「やっていない」という言葉を聞きたかった。

さも全部話してすっきり、みたいな顔で「仕事があるんで」と立ちあがった浩平につられて、その場は散会となった。

それ以上は何も言わずに、杳が刑事達をまとめてエレベーターに乗せ、空になって帰って来たエレベーターに、俺と鈴木と篠原を乗せた。

扉が閉まる直前、杳が俺に言った。

「頼みます。修平さん」

「お前になんか頼まれなくなつて、俺の大事な兄貴の事なんだぞ。犯人は俺が必ず捕まえてやる」

「捕まえるのは貴方ではないでしょう？警察です」

大嫌いだつた杳の減らず口が、その時ばかりは頼もしく思えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2011m/>

selection dool

2010年10月10日11時30分発行